

愛の奉仕

— カトリック教会 2000 年の歴史 —

(PALABRA 507-508. IV-2006)

初代教会と教父たちに見る愛徳

Jesús AZCÁRATE FAJARNÉZ

異教徒たちの注意を引いたのは、キリスト教徒たちが互いに愛しあい、一致し、本当の兄弟のように財産を公平に分配し貧しいものがいなかったことであった。3世紀の末にラクタンティウスは、「私たちの間には奴隷も主人もない。私たちの間に区別はなく、兄弟と呼び合っている。キリスト教はこの世にとって、人を愛し助け守る天からの助けである」と書いている。

教会の黎明期には愛徳の行為として財産の共有が実行されたが、それはイエス・キリストが約束された永遠の救いのために財産を自主的に放棄することが役に立ったからである。しかしながら、人間性の弱さのため、財産の共有は姿を消していった。ただし、その裏にあったキリスト教的愛徳は異なる現れを見せながら引き続き存続した。

隣人愛

イエス・キリストの掟は本当に新しいものであった。と言うのは、「この世は、キリスト以前は愛のない世界であった」からである。ある歴史家が下した、このおそらく少々言い過ぎとも言える評価は、キリスト教がなぜ大衆だけでなくエリート層をも引きつけたのかを説明する。愛の福音は人間が互いに兄弟として愛しあうべきだと示し、それを実行に移させた。その兄弟愛は人間の心の奥底に隠れているが、いかなる哲学者もそれを人々が日常生活の中で実行するようにさせた者はいなかった。「教会は初めからから、このような責務を極めて重要なことと考えていました」とベネディクト 16 世は回勅『神は愛』(20) に書いた。祈りと「み言葉の奉仕」をなおざりにすることなく、「食卓の奉仕」と呼ばれた愛徳の実行をやり抜くために、使徒たちは主要な任務だけに専念し、寡婦や共同体の食卓の奉仕のために 7 人の助祭を選んだ。

キリスト教徒の愛の行いは異教徒たちを驚かせた。テルトゥリアヌス (~220 年頃) はキリスト教徒を見て、「ほら、あれほど愛しあっている」と多くの異教徒が言っていたことを証言している。彼特有の激情によって、テルトゥリアヌスは「彼ら (異教徒) は互いに憎しみあっている」と付け加える。背教者ユリアヌス帝 (在位 361~363 年) は、キリスト教徒の愛徳の強さに印象を受け、伝統的宗教の復活事業においてそれを模倣しようとした。

キリスト教徒の愛徳は、信者だけではなく共同体の外にいる人間にも向けられた。(中略) 外部の人々に対しては、寡婦や孤児や貧民といった最も弱い立場にいる人々への援助が最初の時期から実行されていた。その援助は施しや必要な品々の供与や、とくに個人的な世話によって行われた。聖ユスティヌス (~155 年頃) は『第一弁明』の中で「主日のミサの中で、困っている人々のためになされる献金について、「生活にゆとりがあってもさう望む者は、それぞれが良しとする基準に従って定めたものを施します。こうして集まった金品は指導者のもとに保管され、指導者は自分で孤児や寡婦、病気その他の理由で困っている人々、獄中になつがれている人々、異郷の生活にある外国人のために扶助します」と述べている。テルトゥリアヌスは

カルタゴの教会では、信者が困窮者を助けるために施しや寄付を入れる共通の箱があったことを話す。

キリスト教徒の愛徳は、とりわけ何か災害が起こったときには際立った。例えば、3世紀中頃にアレクサンドリアで伝染病が猛威を振ったとき、キリスト教徒は伝染の危険も顧みず病人の世話を当たった。他方、異教徒たちは家族の者でも病人を放置し、死者の埋葬さえしなかった、とアレクサンドリアのディオニシウスは証言している。同様に、カルタゴ司教の聖キプリアヌス（～258年）はペストの際に信者たちを励まして異教徒も除外せず病人の世話をするようにさせている。

『使徒の訓戒』（Didascalia）は、ある共同体では司教が個人的に貧者の状況を完全に知悉し彼らを助けていたと言う。この訓戒には官僚的なものが全くないことに興味が引かれる。助祭は、裕福な者と貧しい者、孤児や失業者や寡婦を知っているので、「助祭は司教の耳となり、口となり、心となり魂にならねばならぬ」とある。

信者は普遍的な教会に属しているとの自覚を持ち、他の共同体との連帯意識を持っていた。聖パウロは母なるエルサレムの教会のための募金でもって連帯の絆を強めた。ドミティアヌス帝の迫害の時代から、ある教会がひどい目にあうと他の教会がその援助に駆けつけていた。この役割において最も目立ったのがローマ教会であった。「アンティオキアの聖イグナチオ（117年頃没）はローマ教会が『愛（アガペー）において優れている』と述べています。そこから私たちは、イグナチオがこの言葉でローマの教会が具体的に行っていた愛の活動をも表そうとしてのだと考えることができます」（『神は愛』、22）。コリントのディオニシウスも、ローマの信者の愛徳を賞賛している。「最初からあなたたちの間ではすべての兄弟たちに様々な仕方で手をさしのべ、それぞれの町の多くの教会に援助物資を送る習慣となっている」と。カエサルリアのエウセビオスはその『教会史』の中で、3世紀にはローマの教会はシリアの諸教会を維持していたと証言し、聖バシリウスはカパドキアの教会がローマの教会の援助のおかげで、蛮族の捕虜となったキリスト教徒を買い戻すことができたと言っている。

孤児と寡婦

キリスト教徒の慈善によって最初に恩恵を受けたのは、当時は絶望的な状態にあった孤児と寡婦である。サモサタのルシアヌスという異教徒は、キリスト教徒の共同体で孤児と寡婦が特別に世話を受けており、真っ先に物資の分配を受けていると指摘している。

古代ローマ社会において、孤児の置かれた状況は悲惨であった。普通は死の危険から逃れるためには、奴隷か売春婦になるしか手がなかった。キリスト教徒は、孤児と親から棄てられた子供たちを助ける組織を作った。『使徒の訓戒』には、「もし信者が孤児を見つけたら、それが男子であるか女子であるかを問わず、子供のいない信者がその孤児を養子にすることは美しいことである。もし子供がすでにいるなら、孤児が女の子ならその子を養子にし、しかるべき時が来れば息子の嫁にして、神への奉仕の業を完成させるのは冥利につきることである」とある。そのほか、司教は孤児の女の子の面倒を見て結婚させ、そのために必要な結婚資金を準備してやるのが義務であるとしている。孤児が男子である場合、彼がのちにまっとうな仕事で生活の糧を得ることができるように、仕事を学ばせるように配慮するべきであるとも言っている。

貧しい寡婦たちは共同体によって保護された。教会はこのようにして社会の冷たさに対抗したのだ。（中略）。アレクサンドリアの聖クレメンスは「孤児や寡婦、とりわけ貧しい孤児や寡婦を訪問することは美しく有益なことである」と書いている。聖ポリカルプスは寡婦を神の祭壇と呼んでいるが、それは彼女らが信者の供え物で生活をしているからであった。教皇聖コルネリウス（251～253）は、ローマの共同体は当時1500人の寡婦と貧しい人を養っていたと言っている。アンノーナ *annona* という食料の備蓄制度をキリスト教的に改善し、貧者や孤児に穀物をただで分配できるようにした。

迫害されている人々への世話

厳しい迫害の時代、官憲に負われた人々は、信者たちから特別なし方で世話を受けた。それは監獄の中や、強制労働のための収容所の中にまで及んだ。彼らを訪問し、差し入れを運び、時には待遇を改善させることもあった。たとえば、カルタゴの助祭テルシウスとボンポニウスは、看守に金を渡し、監獄にいたペルペトゥアとその仲間たちが一時的に監獄の外で休むことができるようにした。監禁された者の中には、教会に迷惑をかけたくないと、この種の申し出を断る者もいた。

殉教者の子供たちは、特権的な地位にあった。ペルガモ（現在のトルコ）において、子供のことを考えて信仰を捨てよと勧められたアガトニケは、「私の子供たちのことですか。神様が彼らの世話をして下さいます」と突っぱねた。信仰の兄弟たちが、遺児を引き取り世話をしてくれることを知っていたからである。カイサリアのエウセビオスは、セベルスという信者がパレスチナで殉教者の未亡人と孤児たちの世話をする役目を引き受けたことを伝えている。アレクサンドリアでは、一人の女性が殉教者レオニデスの子供、オリゲネスを引き取った。このオリゲネスは、3世紀初頭に迫害が激化したとき、18歳の若さで殉教者たちの世話に一身を捧げた。「・・・彼は聖なる殉教者たちが獄中にいるときや、取り調べを受けて最終判決が下されるときに彼らの傍らにいたばかりか、その後で彼らが処刑のために引き出されたときにも、その傍らにいて大胆そのものに振る舞い、危険な目にあうほどだったからである。彼は殉教者に近づき、大胆に彼らに接吻して挨拶したので、周囲の異教徒の群衆は何度も激昂し、すんでのところを彼を石うちにするところだった。しかし、そのたびごとに神の聖なる右手の救いがあり、彼は奇跡的にそれをまぬかれたのであった」(『教会史』、VI, 3)。

殉教者たちとの愛徳は感嘆せざるを得ないものだった。互いに信仰に踏みとどまることができるように助け合い、最年少者、最も弱者、恐怖に震えている者のことを考え、彼らを励ますため、または一度迷った後再び立ち上がることができるために、暖かく優しい雰囲気を作り出した。リヨンでは、若い女性のブランディーナがわずか15歳の少年であったポンティクスを支えた。フェリチタスとペルペトゥアは互いに励まし合った。殉教録は、実に兄弟愛を歌った叙事詩でもある。

病人と死者

また病人の家への訪問も行われた。助祭たちは彼らにご聖体を運んでいき、しばしば物質的にも手をさしのべた。助祭には、「宿泊施設を訪れて、そこに見捨てられた病人や貧しい人がいないかどうか調べること」が求められていた。東方教会では、寡婦が貧しい女性や病気の女性の世話を特別に担当した。

聖ヒポリトゥスの『使徒伝承』によれば、病人や困窮者の世話は助祭だけに任されていたのではなく、全信者の任務でもあった。洗礼志願者には、「汝は寡婦を大事にしたか。病人を訪問したか。あらゆる種類の慈善を行ったか」などという質問がなされた。多くの場合、助祭は一人の孤独な病人がいると、彼を受け入れてくれる家族を捜した。

病人への配慮の結果として、病院という施設が生まれた。これは古代世界には見られなかった、キリスト教の貢献である。ローマには例外的に戦傷者や病気になった兵士のための施設があったが、コンスタンティヌス帝が教会に平和を与えて以後、教会は国家から受けた安定と援助のおかげで病人看護の施設を立ち上げることができるようになった。キリスト教的病院を最初に作ったのは聖エレナ(242~329)である。その子コンスタンティヌス帝は聖地へ赴く巡礼者のための病院をコンスタンチノーブルに建設した。

アレクサンドリアでは、多大の寄付のおかげでインドロと呼ばれた司祭が管理した病院があった。このエジプトの町で特に注目に値するのは、司教の指導の下に修道士のような看護師の組織があったことである。

北部アフリカにも病院が建っていった。ヒッポの司教、聖アウグスティヌスは自分の町で一つの病院を管

理した。蛮族の侵入の際にカルタゴ司教デオグラチアスは、二つの教会を病院として使った。

異教徒の驚きの的となった別の慈善の業は、キリスト教徒がすべての死者を埋葬することであった。キリスト教共同体においては、死者の埋葬は貧しい人になされる最後の慈善の業と考えられた。教会は自己の信者だけでなく、疫病や災害や事故で死んだが放置されたままになっている死者をすべて埋葬するよう心がけた。それは助祭の任務の一つであった。当時の記録に「もし助祭が海に接した町に住んでいるなら、しばしば海岸を巡回して浜に打ち上げられている死体がないか探す必要がある。もし見つけたら、適切に服を着せ埋葬しなければならない」とある。貧民や外国人は共同体が自費で埋葬した。アリストイデスは『護教』の中で「貧しい人がこの世を去るたびに、それを知った信者は自分の費用でその死者を葬らねばならない」と書いている。死者は火葬ではなく土葬にした。それはキリストの埋葬に真似ようとしたからである。ローマでは裕福な信者は共同体の貧しい人に自分の墓所を提供した。死のときまで、キリスト教徒は兄弟愛で結ばれていた。

奴隷制度

奴隷制度の衰退も教会のおかげである。奴隷制度が完全に消滅することはなかったが、大幅に減少した。キリスト教はすべての人が神の前で同じ品位を持つと宣言した。ラクタンティウスは『神的訓示』（4世紀初頭）で「我々の間には奴隷はいない。彼らと同じ信仰をもつ兄弟と考え、そう呼んでいる」と言っている。またキリスト教共同体は、施しの一部を奴隷の身請けのために使っていた（解放の施し）。ミラノ司教、聖アンブロシウスは数人の奴隷を解放するためにカリスを売却するに至った。

また教会は、ローマ法に反して、奴隷同士の結婚を有効とした。自由人と奴隷との結婚も、教会は当時の法と習慣に反して、それを認めた。それだけでなく、この場合、奴隷が解放されることを国家に要求した。

聖アウグスティヌスは奴隷制度は神の意志に反するもので、人間社会の不正と暴力の結果だと考えていた。教父たちは異口同音に奴隷に対して非人間的な扱いをすることを非難した。教会のおかげで4世紀から奴隷解放の大きな波が起こった。聖ヨハネ・クリソストモ（金口聖ヨハネ）は信者に勧めて、解放される奴隷が自由になった後もちゃんと生活できるように何か手に職をつけることができるように配慮することを促している。

* * * * *

初代教会での施しのススメ

教父たちは信者に社会的責任感を植え付けることを忘れず、金持ちには貧者を助けることを励まし、富裕者の贅沢や狭い心を非難した。古代社会の消費主義を断罪したが、なかでもそれが富裕層の間で義務的と考えられていたことに異を唱えた。私的財産権は認められたが、それは神から社会の善のために個人に任されたもので、所有者は管理者であると教えられた。そして、施しについて多くが語られた。『ディダケ（12使徒の教え）』には、「自分の労働で獲得した何かをもっているときには、罪の贖いとしてそれを人に与えよ」（4章、6）とある。

大聖バシリウス（379年没）は、当時誰よりも社会問題を扱った教父の一人であることは疑いないが、ある説教でこう言っている。「金持ちの義務は財産を持たない人を考えて、自分の財産を管理することである。自分が死ぬとき、何も持って行けないのだから」

聖ヨハネ・クリソストモ（金口聖ヨハネ）（407年没）は愛徳を扱った説教で、多くの金持ちを改宗させることに成功したが、同時に他の人々から恨みを買った。金持ちとラザロのたとえ話についての説教で、「自分の持ち物から貧者に何も与えない者は、貧者から盗むのと同じ罪を犯し、自分の永遠の命を危険に曝す。私

たちが持っているのは自分の財産ではなく、彼らの財産であることを思い出せ」と言っている。

次は聖アンブロシウス（397年没）の言葉である。「貧しい人に与えたのではなく、彼のものを返したのだ。と言うのは、それはみんなのもので、みんなの役に立たせるために君に与えられていたもので、それを君が奪っていたのだ。この地はみんなのもので、金持ちだけのものではない。」別の機会には高利貸しを批判し、利子を取らずに、ときにはその返済を求めずに金を貸すよう励ましている。そうして、「労働者に彼が必要な賃金を支払わない者は殺人者である」と考えていた。

大聖レオ教皇は、「私たちは神から霊的物的富を受けることを強調し、それらの富が「自分が持つためと言うよりむしろ人々に分配するために私たちに与えられた」と教えている。最後に大聖グレゴリウス教皇（604年没）は「私たちの富は私たちのものではなく、私たちを存在せしめておられる神から頂いたものであるなら、自分たちのためだけに所持するべきものではない。それはみんなのために私たちの創造主から与えられたものなのだ」と断言している。



古代世界から「愛のヨーロッパ」へ

Álvaro Fernández de Córdova, Instituto de Historia de Iglesia, Universidad de Navarra

313年のミラノ勅令の後、キリスト教共同体は公式に認められた団体となり、ローマ帝国を構成するあらゆる部分に浸透し、それらに新しい内容を与え、ストア哲学流の人道主義と繋がる精神で法制度を変えてしまった。法制度の変革における新しさとは、新しい法律を「発明していった」という意味ではなく、社会の根本的な制度（結婚と家族）を守り、最も弱い人々（捕虜、奴隷、子供）を保護するために、ローマ法の最良の部分の採って新しい法を作成したと言う意味である。

帝政後期には、すでにかつての共和政期の家族観は衰退していた。元老院議員階級の間では、家父長の一夫多妻制や子供の早期の結婚や赤子の遺棄などの新しい風習が広がっていた。このような状況を前にして、初代の信者たち（その多くが上流階級の夫人たち）は結婚の品位を守ろうと法制度の改革に励んだ。その結果、4世紀以降、婚約の行為をより重要視し、離婚を限られた場合に制限し、家父長の子供に対する権限を制限する法ができた。

囚人が日光を見るようになる

ミラノ勅令以降、抑圧された人々、中でも悲惨な監禁状態に置かれた人々に対する待遇をより人間的にするような立法が促進された。その結果、7つの法令（『テオドシウス法典』に収録されていた）が矢継ぎ早に出て、囚人を餓死させること、拷問で死に至らしめることが禁じられ、囚人も太陽の光を見ることができ、週に一度は風呂に入ることができるようになった。最後にホノリウス皇帝（393~423）は、司教の義務として、監獄を毎週訪問し、囚人が人間的な待遇と霊的な世話を受けることができるように配慮することを決めた。

自由人であろうが奴隷であろうが、犯罪者であろうがなかろうが、また宗教が何であろうが、ひとたび教会に逃げ込めば、教会の保護下に入るという権利が認められた。418年、彼らの債権者から追われたマオン（マヨルカ島）のユダヤ人たち、また410年のローマの強奪に際して死の危険に面した異教徒たちは、教会に避難して助かっている。

異教徒の皇帝の驚き

教会は最初から重税や不景気を逃れるために都市に流れ込んでくる貧民の世話を自己の責任と考えた。この仕事において司教が重要な役割を担った。その任務は食料や衣服の分配にとどまらず、裁判において被告を弁護し、帝国当局に対して都市を代表し市民を守ることに及んだ。キリスト教徒の貴族も、異教世界では空白となっていた部分を埋めるこの新しいメンタリティーに応えようとした。以前には貧しさということが賞賛の対象となることはなかった。4世紀になって初めて、墓碑に貧しさという言葉が現れる。例えば、ユリウスとその妻の墓には、「貧しい者を愛した働き者」 *amatrix pauperum et operaria* とある。

やがて貴族の中に「寄付の洪水」とでも言える現象が始まる。例えば、執政官ランパディウス（367年）、テオディオス帝の妻ブラシラ、あるいは例のファビオラ（399年没）が挙げられよう。ファビオラはキリスト教徒の教養ある上流夫人で、聖ヒエロニムスによれば、一軒の家を病人の世話のために捧げたが、それはおそらく歴史上最初の病院と言える。元老院議員パンマキウス（410年没）は洗礼を受けるとすぐに、オスチアの門の横に巡礼者のための宿屋を作り、死に際してはまだ相続されていなかった財産を貧者に与えた。施しがキリスト教徒の基本的な義務であるという考えが広がり、古代社会の価値観を根本から覆してしまうことになる。背教者ユリアヌス帝の次の言葉は、このことを現している。異教徒でキリスト教を憎悪したこの皇帝は、「ガリラヤ人たちの」救済活動から強い印象を受け、異教の祭司にこう書いている。「不敬虔なガリラヤ人どもが、自分たちの信者だけでなく我々の信者にも食料を与えているとは何という恥であろう」（『書簡』、84,430d）。

奴隷制の斬新的な消滅

4世紀から10世紀にわたる600年の間に、奴隷制度という古代の最も代表的な制度がゆっくりとしかし着実に消滅していった。奴隷制は古代社会を支える制度で、自由人が肉体労働を他の人間に押しつける制度である。奴隷は、物品や動物と同じように売り買いされる「物」と考えられ、家族を持つ権利や結婚する権利を剥奪されていた。奴隷制を消滅させるには、暴力的な革命よりも、社会の世界観の変革が必要であった。すでにストア哲学はすべての人間が共通の本性を持つことを主張することでその下地を作っていたが、その後キリスト教はすべての人間が神の子として平等で、一人残らず永遠の命に招かれていると宣言した。こうして、キリスト教徒は奴隷を動物のようではなく人間として扱い、彼らにも教会の門戸を開いた。初代教会の中に迫害の際に殉教したカルタゴのフェリシタスやリヨンのブランディーナのような奴隷出身の聖人を見つけることができるのも偶然ではない。聖ヨハネ・クリソストモは「教会にとって自由人も奴隷もない」と断言している。ということで、奴隷も司祭や司教に叙階されることができた。カリクスト1世（217~222）のように教皇になった例さえある。

コンスタンティヌスの法令はこの考えの変化を吸収し、奴隷の額に印を付けることと奴隷を家族から引き離すことを禁止し、教会に「教会の中で」（教会法の上でと言う意味か、訳者）奴隷を解放する権利を認めた。後に、帝政の末期の法律では、奴隷も洗礼を受けた者として礼拝に参加し結婚をする権利が認められた。メラニアやピミアヌスのような貴族、メリダの司教マソーナや修道院長聖エロイなどの例のように、権威者が大量の奴隷を解放することも見られたが、教会はこの点では、誰の利益にもならないような社会経済的混乱をさけるように慎重に振る舞うことを勧めた。聖ヨハネ・クリソストモは、奴隷を解放する前に、彼らに手に職を付けさせ自由になってから生活費を稼げるように配慮することを勧めた。クリシー Clichy の会議（626~627）を初めとして多くの教会会議が、法律によって国家に属し委譲が禁じられている教会の土地に耕作人を確保しないなら、一度に大量の奴隷を解放することを禁じている。こうして紆余曲折を経て（ノルマン人の侵入の際は退歩した）、奴隷制という怪物はヨーロッパから姿を消していき、過去の遺物となったのである。13世紀にボーマノワール Beaumanoir のフィリップは「この王国においては一人の奴隷もない」

と書くことが出来た。

「平和」運動

(略)。カロリング朝の崩壊は、戦士中心の戦闘的社会を生みだし、戦士たちは徐々に貧しい人々の上に暴力を振って行った。この状況に対して教会は平和運動を起こしたが、それはクリュニー修道院によって促進された。この修道院は 10 世紀の末にフランス南部で生まれ、一般信徒も参加した司教会議のおかげでヨーロッパ全体に広がっていった。ル・ピュイ (975 年) やシャロン (989 年) の司教会議によって、「神の平和」という制度ができた。それは武器を持たない人々 (農民、聖職者、商人、寡婦、巡礼者) を守り、いくらかの場所 (小聖堂、市場、家) に不可侵の特権を与えた。「神の休戦」という制度もあった。それはペルピニャン (1041 年) やエルヌ (1059 年) の司教会議で定められたが、一年のある時期 (待降節、降誕節、四旬節、復活節) や一週のうちいくらかの日 (木曜の夜から月曜まで) にさえ戦争を禁止し、戦争が許可される時間を制限した。こうして中世では戦争は場所と時間を制限されることとなり、三日以上連続ではできず、また戦火は一定の場所には及ぶことがなかった。

「平和の司教会議」は戦士たちに一定の行動規範を示し、彼らを新しい理想に導こうとした。そしてそれを破る者 *effractores pacis* には、痛悔するまで共同体から追放するという破門罰も含む霊的な罰を課した。こうして、戦士から剣を奪うとか、彼らを修道院に入れたりすることによってではなく、この社会での身分を棄てずに平和の維持と弱者の保護に挺身するように招くことによって、戦士を騎士に変える「戦士の道徳」の基礎が作られていった。聖ベルナルドは、修道騎士会の誕生を支持し、このプロセスを強めた。「新しいキリストの兵士は、キリスト教世界の内側で剣の使用を聖化することによって、この世の兵士を凌駕する。」

結婚のキリスト教化

8 世紀から 12 世紀の間に教会が推進した大きな社会改革の一つに、結婚のキリスト教化がある。それは権威による結婚を、男女の平等の立場に立った結婚に変えたのである。封建時代の貴族にとって、結婚は血縁関係の網を張り巡らすための重要な政策であった。他の家系との対立を収めたり、家族の領地を増やしたりするために子女の結婚は利用され、当人の自由はまったく無視された。その結果、畜妾や離婚、姦淫、近親同士の結婚などの悪弊が蔓延していった。

福音書の原則とこれほど離れた考え方を前にして教会は反応した。1050 年に結婚の本質である夫婦の絆を守るため、大々的な活動を始めた。まず第一に、神学者たちが結婚の有効性のため当事者二人の自由な同意が不可欠であると宣言した。すでに 9 世紀の末、ニコラス 1 世 (856~867) とランスの大司教ヒンクマールはこの同意主義を公に宣言し、ロタール 2 世 (855~869) の離婚の試みを封じようとしたことがあった。ウルバノ 2 世 (1088~99) は同じ原則を振りかざした手紙 (後にグラティアヌス法令集に収録された) をもって、アラゴン王が命じた結婚相手を拒否した王の姪を守った。

この考え方の変化には注目する必要がある。婚約者の自由な選択を認めるということは、婚約者二人の意志だけが力を持つ自由の禁域ができるということを意味し、どのような慣行や決まりを無視して二人だけが秘密に結婚をする可能性を生み出す。自由な選択はこうして愛情の愛 — 他がその他性ととも愛される — へと導き、貴族的な「宮廷愛」に流れ込む。(略)。

福音書の教えに従って、教会は一夫多妻制と離婚を非難した。離婚された女性には、持参金がなくなった時点で身を立てるすべはなかった。12 世紀の教会法学者たちも、同族外結婚を促進するキャンペーンを始めた。それはすでに 4 世紀にアウグスティヌスによって支持されていたが、近親結婚を減少させ、過度に閉鎖的な家族グループ同士の対立を緩和した。結婚が秘蹟であることは、夫婦の愛を永遠を志向する相互の与え

合いに、キリストと教会の一致を似せた一致に変える。夫婦の肉体的一致は同意とともに結婚の必要条件であるから、夫婦愛は性を秘蹟の中に組み込んだ一致となる。性をこれほど積極的に捉える考えは 1140 年頃グラティアヌスによって定着させられ、肉肉関係を肉肉という悪を永続させるものとして非難した異端（カトリ派など）に教会が対抗することを可能にした。

愛徳が輝く新しいヨーロッパ

中世前期において、社会福祉活動は森に覆われたヨーロッパを開墾していった修道院や教区の手にあった。貧しい人々はそれらの施設の中で生活必需品をもらっていた。こうして、彼らが放浪生活や犯罪に走ることを防いだのである。封建社会の分裂傾向に抵抗していた都市では、小規模ながら病院や宿泊施設が建ち始め、それらは病人のための看護施設や巡礼者のための宿泊施設、身寄りのない貧しい人々のための避難所となった。それらの原型は 7 世紀メロヴィング朝フランスや西ゴート王国に見出される。前者ではクレルモンとポワトゥーの司教たちが二つの病院を建て、後者ではメリダのメソーナ（606 年没）が建てた大きな病院が抜きん出ている。その病院はユダヤ人であろうがキリスト教徒であろうが、誰でも受け入れた。

10 世紀にヨーロッパの中央で盛んになった巡礼は、やがて真実の「愛徳の動脈」となり、大陸を病院と宿泊施設で満たしていった。サンチアゴへの道はロンセスバーリエスから使徒の墓所まで救護施設の帯となった。サン・ホアン・デラ・ペーニャ、レイレ、イラチェ、ナヘラ、サン・ペドロ・デ・カルデーニャ、またはアストゥルガのサン・サルバドルなどの修道院は病気になった巡礼者を救護するための有名な病院を備えていた。ブルゴスの付近がおそらく最も充実していただろう。そこには 30 ほどの病院施設があった。たとえば、皇帝の病院、聖ヨハネ病院、なかでも 1195 年にアルフォンソ 8 世によって建てられた王の病院は、15 世紀末には 87 のベッドが備えられていた。レオン市には 20 の病院があったが、そのうち聖インドロ修道院の院長たちが管理した聖マルセロ病院と、1152 年に王妃サンチャによって創立され、1175 年にサンチアゴ騎士団に譲渡された聖マルコ病院は逸することができない。

中世後期の注目すべき革新は托鉢修道会によって再び活気づかされた福祉活動に一般信徒と都市当局が参加するようになったことだ。13 世紀の初めから、「裕福なイタリア商人が、盛大に施し」をし、慈悲の家や病院を建て始めた（Orden de la Penitencia, s.XIII）。14, 15 世紀のフランスでは、都市や領主や参事会の費用で日々の食事を配給する（ ）が急増した。教皇自身もアヴィニオン捕囚の間、かの有名な Pignotte を創設し、毎日 3 千人以上の人々に食料を分け与え、その半分に毎年衣服を支給した。

兄弟団や同業組合といった組織は、都市の中でますます多様化する救済事業を繰り広げ、病人や体の不自由な人たち、寡婦や老人、さらに売春婦にさえも救助の手を差し伸べた。バリエドリード市の慰めの兄弟団によって経営されていた「道を誤った女性たちの家」では、彼女たちの疾患の治療に当たり、結婚によって社会復帰ができるように努めていた。沢山の施設が地域ごとにまとまっていたことは、その社会が隣人の欠乏に対し決して無関心でなく、その城壁や教会の内部で貧困と戦おうとしていたこと示している。

* * * * *

ビザンツ帝国、病院の国

東方教会はすぐに「福祉の網」を広げた。そして、それは 4 世紀の末にはアンティオキアの都市人口の 10% を占めた困窮者たちの必要を満たすために日に日に専門化されていった。それらの施設の中には病院（nosokomia）、老人介護所（gerontocomia）、貧民と巡礼者のための病院（xenodochia）、孤児院（orphanotrophia）などがあった。総主教アティコ（406~425）が、飢えに苦しむ人々を助けるための 300 枚の金貨を受け取ったばかりのニケアの司祭にした説明によれば、コンスタンチノーブルのような大都市では

「私たちと同じように考えるかどうかに関わらず」住民を援助していた。聖バシリウス（330~379）は「新都市」、あるいは「バシリアス」と呼ばれた大きな総合病院を建て、エデッサでは聖エフレム（306~373）がペスト患者のために 300 のベッドを備えた病院を創設した。またエジプトでは、4 世紀から 6 世紀にかけて公の福祉事業を担った有名な「ディアコニア」、つまり法人として認可された組織が増えた。

この福祉の伝統は中世を通じて発展し、12 世紀の初めにはコンスタンチノーブルのパントクラトル修道院には常勤の外科医と医者グループを備えていた。

* * * * *

中世の女性

妻が夫に完全に従属するユダヤ教や、男性の下位に女性が置かれたローマ世界とは異なり、中世ヨーロッパの女性は封土を管理したり修道院を指導したり、村の会議で投票したり、あるいは夫の許可なしに法的な行為をしたりすることができた（E.Power）。結婚が自由な同意による考えによって女性は家族からの無理強いを免れた。姦淫において不平等があったと非難する者があるが、それに対しては次の二つの例を挙げておこう。一つはロベール 2 世（996~1031）の例で、同王に対して教皇は、妻がまだ存命であるとの理由で、愛人ベルト・ド・ブルゴーニュ（ブルグント王コンラートの娘でプロワ伯ウード 1 世の未亡人）と別れることを命じた。そして、フィリップ 尊厳王（1165~1223）はアニェスと結婚するためにデンマークのインゲボルグを追い出したために、インノケンティウス 3 世から破門されている。

この「理論的革命」（ル・ゴフ）は中世の女王たちがいかに振る舞ったかに如実に表れる。彼女たちは、政治的権利を持たなかったアテネの女性たちや、共和国の政治の外に置かれていたローマの上流階級の女性たちとは違った。6 世紀の後半、ビザンツの女帝は夫帝と並んで法的な宣誓を行い、自身の貨幣を鑄造し、「王国の伴侶」という称号を紋章に付けた。この称号は教皇ニコラス 1 世（858~867）によって認可されている。中世ヨーロッパでは、女王たちは王と同じく戴冠され、1100 年から 1600 年までの間、少なくとも 20 人は自己の資格で統治した。この 20 人の中には王の伴侶として共同統治した者と、摂政として統治した者を省く。カスティーリヤの王女ブランカ（フランス王ルイ 9 世の母、フランスでは「ブランシュ・ド・カスティーユ」と呼ばれている）、ババリアのイサベル（1385~1422）、カスティーリヤのイサベル女王（在位 1474~1504）たちは強大な権力を振るったが、それは近代になると女性から取り上げられた。今日ヨーロッパ諸国で「首相」になっている女性の数は、中世に国家を統治した女王や女摂政より少ない。

○ ○ ○ ○ ○

修道者による社会事業の歴史

Sanchiango CANTERA MONTENEGRO, O.S.B. Abadía Santa Cruz, Valle de los Caídos

修道生活者の共同体は、最初に東方世界に、次に西方世界に現れたが、彼らも貧しい人々への奉仕をなおざりにしなかった。修道士たちは、神との親密な生活に専念するために静かな離れた場所に引きこもったのだが、自分たちがする手仕事の主な実りを貧しい人々の援助に当てた。すでに「修道者の父」と呼ばれる聖アントニオ（356 年没）は、自己の財産を売り払いそれを貧しい人々に与えた。

最も傑出した修道者たちの間にも、自分の指導する信徒に社会事業や慈善事業への関心を呼び覚まし、病院を建設、経営し、奴隷を解放し彼らに財産を分配するように勧めていた者もある。人生の大半を修道者として過ごし、キリスト教社会教説の走りを作成した教父もいる。

困っている人々の受け入れ hospitalidad

修道士による慈善活動の中で最も特徴的なものは、貧窮者を修道院に受け入れる態度である。修道院の規則のほとんどが、訪問者に暖かい待遇をするように命じている。聖ベネディクト（547年没）の会則が、そのような人々を「キリスト自身と違って」受け入れるようにと命じているように、この愛徳はキリスト中心主義から生まれている。時代が下るにつれ、修道院は貧しい人々のため施設（*hospitale pauperum*）、病人や巡礼者のための施設（*hospitale peregrinorum*）、そして旅行者のための宿泊施設（*hospitale hospitum*）に分化していく。

すでに言われたように、古代世界には未知のものであった病人の世話は、キリスト教だけがこの世界にもたらした慈善活動であった。再び聖パシリウスに目を向けるが、この教父は自己の教区の各小教区に病院を設立し、首都を紛れもない慈善の町に仕立てただけでなく、東方の修道生活の制定者として修道士たちが自分の仕事の大部分を愛徳の業に当てるように命じた。

とりわけ修道院のこの種の活動が大きな影響を持ったのは、サンチアゴの道を始めとする中世の巡礼路沿いであった。無数の大修道院がこれらの街道の重要な拠点となった。例えば、フランスのモワザック、スペインではサン・ホアン・デ・ラ・ペニャ、レイレ、イラチェ、カルデーニャ、カリオン、サハグーン、サモスなど。

他方、修道士たちは周囲の人々や修道院を訪れる人々の困窮を解決することにも精を出した。例えば、受けた寄付を貧者に分配したが、そのために聖器具までも売り払ったクリュニーの聖オディロン（1049年没）などの大修道院長もいた。他の重要な活動は、修道院の門において食料を分配することであった。多くの場合、食べ物を求めて修道院にやってくる人々を収容する食堂が建てられた。毎日300人に食料を配っていた修道院もあり、クリュニー大修道院は年に1万7千人を養うこともあった。

修道院の会則や規則の中に、救貧活動の義務が定められていた。聖イシドルスの会則は収入の三分の一を貧者に当てるよう定めていた。カロリング朝の時代からこの種の規則が増える。例えば、アーヘンの司教会議（817年）では修道院長たちは修道院への寄付の十分の一を貧者に与えることを決定している。

平和運動と援助

クリュニーの大修道院長たちは、「神の平和」や「神の休戦」を促進しつつキリスト教世界での平和運動に重要な役割を果たした。諸々の修道院は、社会経済関係や奴隷の待遇などにも影響を及ぼし、時には貴族の横暴から弱者を保護することもあった。クリュニーの初期（10世紀）の院長たちは世俗貴族の権力乱用と彼らによる弱者の圧迫を非難した。950年頃、聖オドンは権力を乱用する悪しき貴族たちを非難し、オーリヤックの聖ジェラルドをキリスト教貴族の鏡として称揚している。シトー会を大修道院に発展させた聖ベルナルド（1153年没）は、領主の臣下に対する義務を確立し、シャンパーニュのティボーとエルサレムのメリセングダ女王を模範として挙げた。

また修道院が貧しい農民に無利子の貸し付けをしたり、修道院のために働いてくれた農民の老後の扶助と介護にあたりたりすることもしばしば見られた。19世紀に自由主義政府が教会や修道院財産の没収をしたとき、多くの農民が不安定な状況に投げ出される結果となった。

修道士による病人の扶助

諸修道院が担った病院事業の他に、小さな修道士の団体や個人によってなされた旅行者や巡礼者への世話、並びに道路の改修などの事業が目を見く。その良い例が、アルプスで活躍したアオスタ（マントン）の聖ベ

ルナルド（1081年没）、スペインのリオハで活躍したカルサーダの聖ドミニコ（1109年没）、またその弟子のオルテガの聖ヨハネ（1162年没）、また団体としてはフランスに1189年に生まれた「教皇の信心会」が挙げられよう。

それに加えて中世における病院修道会の誕生にも注目すべきである。そのうちのあるものは、戦士としての性格を病人看護と併せ持っていた。と言うのは、巡礼者、とりわけ聖地への巡礼者の保護と彼らに宿を与えることを目的としたからである。それが1048年に生まれたエルサレムの聖ヨハネ騎士団（病院騎士団。現在はマルタ騎士団）と、12世紀の末にドイツ人の巡礼者のために創立されたチュートン騎士団である。前者は現在までその福祉的生活を維持し続け、国際的に活動をしている。

病人の介護を特別に使命とする修道会も生まれた。例えば、モッタにおいて聖ガストンによって1095年に創立された聖アントニウス会（いわゆる「聖アントンの火」の患者の世話に当たった）。この会は1787年教皇令によって解散の憂き目に会う。また1198年、モンペリエの貴族ギードによって設立された聖霊会、そして最初は騎士修道会的性格を有していたエルサレムのラザロ会は、1255年に認可を受け、ハンセン氏病患者の世話に当たったが、1603年に教皇によって解散させられる。この他、プラハの「十字架団」も逸することができない。これ以外の中世の病院は、小さな信心会や半道士的な生活を送っていた共同体によって経営された。

16世紀には二つの注目すべき病院修道会が生まれた。一つは神の聖ヨハネというポルトガルの聖人がグラナダに立てたものだ。本名をホアン・シウダー（1550年没）というこの聖人は、1537年に改心を経験し、貧者や病人を集め彼らの世話を始めた。数人の賛同者が現れ、マドリッドでアントン・マルティンとペドロ・デ・ベラスコを和解させ、自己の事業の右腕とした。ペドロはアントンの兄弟の殺害者であった。1571年から1619年に至るまでの間に修道会として徐々に形を整えた。聖アウグスティヌスの会則と黒い修道服を受け、貞潔、従順、清貧の他、病人への奉仕を第四の誓願とした。すぐに発展が始まり、既存の病院を引き受けたり新しいものを創設したりした。主にアンダルシアで発展した。神の聖ヨハネの修道士たちの治療法は、時代を先取りしたものがあり、なかでも精神病患者のそれは注目される。

この面で注目すべきもう一つの修道会は、1584年ローマにおいてレリスの聖カミロ（1614年没）によって創立された看護修律司祭会、いわゆるカミロ会である。同会も聖アウグスティヌスの会則を受け、修道司祭を会員とする修道会である。

托鉢修道士による慈善事業

托鉢修道会（特にドミニコ会とフランシスコ会）も同様に様々な慈善事業に関わった。金子や食事や衣服の分配、病院の建設や経営、信心会を創設し社会的事業に関わるように指導することなど。しかし、社会と経済の漸進的キリスト教化により関係する興味深い二つの面がある。

一つは、信心と慈善を厳密な意味での専門職と結びつける信心会や組合を促進したことによって、中世盛期には注目すべきことであったが、手工業や水夫のような他の職業のキリスト教化に貢献したことである。もう一つは、特に15世紀の2、30年代から激しくなった高利貸し撲滅運動がかなりのフランシスコ会士を巻き込み、「慈しみの山」や「憐れみの金庫」と呼ばれる金融機関を創設したことである。それらの目的は、非常に低利、あるいは無利子で、貧しい人々を中心に融資をすることにあった。普通は担保を取るか、より安全な保障を得て、経済的な利益をまったく求めずに行われた。その他に、これらと関連して、不作のときに住民に食料を保管する穀物貸し付け（Montes frumentarios）や、貧しい農民に貸し付ける種籾を保管しておく倉庫 Positos といった制度も発展した。イタリアではこれらの運動の主要な推進者はベルナルディーノ・フェルトレで、スペインでは15世紀末のフランシスコ会士シスネロス枢機卿であった。

活動生活の女子修道会の誕生

17世紀になると、聖ヴィンセンシオ・ア・パウロとマリヤックの聖ルイーザ（ともに1660年没）がフランスで宣教と慈善を目的とする二つの組織を創立した。聖ヴィンセンシオは、王妃マルグリットの慈善大臣となり、かつてゴンディ伯の領地で実行したことのある貧者の物質的・精神的救済の仕事に一生を捧げたいと望んだ。そのうえ、「愛徳信心会」を創立し、1625年には宣教会を設立した。この会は一般にラザロ会と呼ばれるが、スペインではパウロ会、ラテン・アメリカとアングロ・サクソン世界ではヴィンセンシオ会と呼ばれている。その目的は、貧者、特に農民の間での宣教と他の慈善事業を遂行することである。聖職者の改革や乞食の跳梁を防ぐための不良者保護、囚人・漕手の世話、捨て子の保護などに従事した。またマリヤックの聖ルイーザという偉大な協力者を得た。彼女は、寡婦となった後1633年に「慈悲の童貞会」を創立したが、この会は、活動生活を旨とする女子修道会の端緒となった。この修道女たちは最初から貧しい病人を修道院に引き取って看病する他、捨て子や身寄りのない人たち、さらに病院や孤児院や田舎の学校や監獄の人々を世話し、職業訓練にも携わった。

慈善事業の修道会の盛期と「社会的カトリック」

19世紀にはカトリック教会の中で、慈善や福祉の事業に専念する数え切れないほどの新しい修道会が生まれ、ときには確固とした社会正義の樹立に貢献した。なかでも女子修道会の隆盛は注目に値する。それらは老若男女の病人、貧民、未婚の母、道徳的に危険な状況にある少女などの世話看護に当たったが、産声を上げたばかりの貧しい無産者階級にも最初から心を配った。

これらの新修道会のすべてを挙げることは不可能である。ベルギーだけで1800年から1840年の間に聖ヴェンセンシオ・ア・パウロの名を冠する約50の修道会が生まれ、スペインでは1850年から68年の間に慈善や教育事業に携わる20の修道会が誕生した。その代表的なものを紹介するなら、「聖アンナの愛徳修女会」（M. ラフォルスが1808年に創立）、「貧者の小さき修女会」（福者ジェンヌ・ジャガン、1839年）、「聖体と愛の礼拝僕会」（聖体のマリア・ミカエラ、1845年）、「マリアのはした女、病人奉仕会」（聖ソレダー・トゥレス・アコスタ、1867年）、「身寄りのない老人の小さき修女会」（イエズスの聖テレジア・ジョルネ・エ・イバルス、1873年）、「十字架の修道女会」（十字架の聖アンジェラ、1875年）などなど。

労働者の家庭の世話を使命とするものとしては、「被昇天の小さき姉妹会」（1865年創立、エステバン・ペルネット）、「カテキスタの婦人会」（1901年、ドローレス・ロドリゲス・ソペーニャ）などがある。より大きな規模では、聖ヨハネ・ボスコ（1888年没）の「サレジオ会」は創立時から労働者の家族を対象としていた。なかでも労働者階級の少年、青年の教育と職業訓練、人格の向上を目指していた。

このような修道会の繁栄とは別に、伝統的であると同時に革新的な観点から労働者の問題に適切な解決を提供しようとする「社会的カトリック」の流れが、多くの優秀な修道士によって推進された。この流れは教会の社会教説の発達と緊密につながれている。フランスではパウロ会のメニエンがパリにおいて労働者の最初の組織を作り（1850年）、スペインではドミニコ会士のセフェリオ・ゴンサレス神父（1894年没。スペインの首座司教となる）とイエズス会士アントニオ・ビセント（1912年没）がそれに続き、さらに社会問題を研究し様々な企画を練った。イエズス会士の中では、アンヘル・アヤラとホアキン・アスピアスのような著名な人物の名も逸することができない。

20世紀の新しい修道会

20世紀にも慈善事業を使命とする新しい修道会が生まれた。そのなかには、アウグスティヌス会士サレル

ノ神父による「第三世界の貧者の僕会」のように発展途上国に目を向けるものもあった。しかしこの面で傑出しているのは、なんと言ってもカルカッタの福者テレサ（1997年没）によって1950年に創立された「愛徳宣教会」であろう。1965年からはインド以外の国々でも活動を始めている。それは常に「貧しい人々のなかで最も貧しい人々への奉仕」を旨としつつ、三つの方向に向けられている。つまり、死に行く人たちの介護、貧しい子供と捨て子の世話、ハンセン氏病患者の世話である。最近ではこの他に麻薬中毒患者とエイズ患者の世話にも当たっており、マザーは最初から全世界で堕胎反対の運動でも群を抜いていた。

マザー・テレサの精神によって、男子の部「愛徳宣教兄弟会」（アンドリュウ神父によって1963年に創立）と観想生活をする会、そして協力者たちの運動の誕生を見た。

第二次世界大戦後、ヨーロッパではプレモントレ会のウエレンフリード・ヴァン・ストラテン神父（2003年没）によって「貧窮の中の教会への援助」が生まれた。この組織は迫害に苦しむ教会、とりわけ共産主義政権下、特に東ヨーロッパの国々で迫害されている教会を霊的かつ物質的に援助しようとするものであったが、すでに鉄のカーテンの崩壊以前から活動範囲をより広げている。



近代。教会による静かな、しかし巨大な社会事業

Fermín LABARGA GARCÍA, Instituto de Historia de la Iglesia, Universidad de Navarra

しかしながら、貧者と流浪者の多さは（16世紀の初頭パリには3万人以上）、当局が看過できない大きな社会問題となった。根本的な解決法は、物乞いを制限することにあった。例えば、ホアン・ルイス・ビーベス（1540年没）はそのように主張している。ところが、1528年ルターが *Liber vagatorum* の中で同じ事を主張するに至って、教会当局はこの措置を怪しむようになり、自由に乞食をさせる方がよいと考え、それを禁じることに反対し始めた。事実、物乞いを禁止すればその当時の多くの貧者は栄養失調で死ぬことを余儀なくされたであろう。ドミンゴ・デ・ソト（1560年没）は『貧困の原因についての考察』の中で貧者の世話をす際、公の組織よりも個人の方に信頼を寄せ、教会の組織が貧者と病人の世話に当たるといった伝統的方式を続けるように勧めている。

教会だけが

事情がそうであったなら、近代の教会史を扱った専門書や概説書が教会に属する団体や個人が繰り広げた巨大な社会事業についてほとんど触れないのは不思議である。その理由は福音書の「施しをするときには、右の手のすることを左の手に知らせてはならない」にあるのかも知れない。

事実、慈善事業を何世紀にもわたって組織的にあるいは自発的に、集団的にも個人的にも推進していたのは、カトリック教会だけであった。それは教会が困窮に陥っている人々を助けることを自己の使命と常に考えていたからである。18世紀の末になって初めて、国家が啓蒙思想による新しい人類愛の理念に従って控えめに社会事業に乗り出した。

近代の初期は、歴史の十字路と言える。ルネッサンスによって新しい世界観がしられたヨーロッパが、新世界を発見する。人間の尊厳を称揚しようとする人文主義的思想（必ずしも反キリスト教的ではない）によって、愛徳の見方にも変化が起こった。

サラマンカ学派、中でもフランシスコ・デ・ビトリアはすべての人は生まれつき譲渡不可能な権利を持っていると強調し、共通善（公共の福祉）を社会の内部の組織を整える原理、平和を維持する原理として掲げ

た。

この考えから、愛徳の行為は単なる個人的な徳の実行としてだけでなく、社会がその安定を確保するための手段としても考えられるようになった。ここから、弱者の権利と強者の義務という考えが生まれるが、これはいつも純粋な自然法を思想を土台としたもので、特殊キリスト教的な議論を介入させるものはまだなかった。

スペインでは1万8千の事業

当時の人々の圧倒的の大部分は、どんな形であれ慈善事業を始めるとき、その種の問題に頭を悩ませることはなかった。最近の研究によれば、18世紀の末期、スペインには福祉事業の性格をもつ1万8千の協会があった。その大部分は教会のなんらかの組織によるものであった。第一に、貧しい人々の世話をするものがあった。キリスト教生活の中心的な面について、人々が広く関心を持っていたことは疑いがない。貧者の救済は、社会のあらゆる階層の人々にとって、毎日普通に行われる活動であった。王たちは、その身分にふさわしい度量をもって貧者を助けた。貴族たちもこの面で王に遅れをとるまいと努めた。

この他に司教たちは貧者救済を司牧の義務と考えていた。と言うのは司教区の収入は司教のものと考えられていたからである。司教は紛れもなく「貧しい者たちの父」であった。この点に関して思い出すべき有名な人物としては、二人のバレンシアの大司教トマス・デ・ビリャヌエバ（1555年没）と聖ホアン・デ・リベラ（1611年没）、リマの偉大な大司教聖トルビオ・デ・モゴロベホ（1606年没）、あるいは自己の収入の大部分を布施に回し自分は貧しい厳しい生活を送ったミラノの大司教聖カルロ・ボロメオがいる。セビーリャが大飢饉で苦しんだ1679年には、アンブロシオ・スピノラ枢機卿は毎日4万の大きなパンを人々に配った。

司祭たちの自己の小教区の貧者たちの世話に当たった。フランスで最も代表的な例は、疑いなく聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ（1660年没）であろう。この聖人は最も貧しい人々を助けるあらゆる種類のイニシアティブに常に援助を惜しまなかった。他の多くの司祭も最下層の貧者たちのために働いた。なかでも聖ホセ・オリアル（1702年没）はバルセローナの聖マリア・デル・ピノ教会の告解場の中から、全力を尽くして貧者と病人のために働いた。

大修道院や修道院はかつては広大な領地を抱え、農地を小作農に貸していた。農業が社会を支えていた時代では凶作の年は飢饉と窮乏の年となった。教会財産の没収以後とは違って、そういう凶作の年には小作料が免除されることが多かった。不作の年にはドミンゲス・オルティスが適切に示しているように、修道院は穀物を安値で売り払った。

飢餓との戦い

托鉢修道院の門前での食料分配は、空腹と窮乏を和らげる効果的な手段となった。Sopa boba と呼ばれたその無料の食事によって、無数の貧者は真実の愛徳をもって世話をされ、命をつなぐことができた。ポツレの聖マルティンはその一例である。聖マルティンは、リマのドミニコ会の修道院で働いていた貧しいムラート（白人と黒人の混血児）であったが、病人の看護に当たり、貧しい人々に食事や衣服や医薬品を支給するように努めた。その働きから、「愛徳のマルティン」と呼ばれるようになった人である。

慈善のために様々な信心会が生まれた。その中で「避難所と敬愛の聖なる信心会」が有名である。この組織は1615年マドリードにできたが、今も存続しており、あらゆる種類の困窮者の救済のプログラムを実行している。その活動の中でもっとも目を引くのは、おそらく、毎晩、当番の団員たちが夜回りをして、倒れているものを見つければ食事を与え、病人を見つければ施設に運んでいく、「パンと卵の振る舞い」と呼ばれる活動であろう。

これらの慈善活動がどれほど必要であったかを理解するために、ヨーロッパのある地方では貧困層と呼ばれる人々の割合が全人口の 80%にまで達していたことを示せば十分であろう。そのような状況の下で、諸修道会が行った救貧活動の重要性が理解できよう。それは多くの場合、秘密裏に行われた。それは黄金盛期のスペイン文学がよりよく示しているように、名誉の感覚に極めて敏感であった社会において、それを傷つけないようにするためである。

たとえば、セルバンテスはその文才によって、浮浪者、放浪者、犯罪者の集まった猥雑な裏社会の有様と、教会の救助の手がそこまで及んでいたことを我々に見事に見せてくれる。多くの場合、それは単に生存を保障する程度の最低限の手助けであったが、救助の目的は疑いなくより広いものであった。すなわち、そういう人々の社会復帰を目指し、時にはできる範囲でのことであるが、貧困の原因を改善しようとしている。

子供、女性、老人

貧しい青少年に特別の注意が払われ、彼らを保護し手に職を付けさせるための施設が設けられた。この仕事に一生を捧げたのが、ミラノの聖ヒエロニムス（1537年没）と彼の創立したソマスカの司祭団である。これと似たようなことを 2 世紀後ローマで行ったのが、聖ヨハネ・バプティスタ・ロッシ（1764年没）で、彼はある意味で聖フィリッポ・ネリ（1595年没）の始めた事業を継続したと言える。同じようにカラサンスの聖ヨセフ（1648年没）と聖ジャン＝バティスト・ド・ラ・サールは、青少年の教育こそ現在の犯罪と未来の貧困を防ぐ最良の手段であると考えて教育事業を始めた。

また孤児院もあった。その最古の例はイサベル女王がトレドに建てたものである。サンチアゴ・デ・コンポステラの孤児院は毎年千人以上の孤児を収容していた。この種の施設を廃止すべきという主張に対して、オトマス・デ・モンタルボはそれらが身寄りのない子供たちにとってどれほどの助けになるかを主張し弁護することに一生をかけた。

若い女性のために作られた施設は、彼女たちに家事に必要な技術を身に付けさせ結婚できるように必要な資金を貯めることを目標としていた。そうして女性の独り立ちに大きな貢献をした。16 世紀の初頭からサラマンカには「1 万 1 千人の処女たちの学校」が存在したが、これは 17 世紀にはめざましい発展を遂げた。普通は各教区長が管理した。

人々の冷たい目に曝されていたシングルマザーを助けるために、彼女たちを対象とした施設やその世話に当たる組織が生まれた。例えば、簡単に「大罪の信心会」で知られる「希望のマリアと靈魂の救済のための熱意の信心会」は、彼女たちの社会復帰を目指し、可能ならば子供の父親を捜して結婚生活に戻らせようと努めた。

いろいろと議論を引き起こした別の件は、売春婦を助けその生活を改めさせることである。この問題のために尽力したシスター、聖ヒエロニムスのマグダレナは、この件について一冊の書物の刊行までした。様々な場所で、「悔悛した女性たち」のための施設が開設されたが、その多くがマグダレナのマリアの保護の下に置かれた。

同様に寡婦のための家も多く開かれ、全スペインに存在した。ブルゴスのブリビエスカの「寡婦の病院」は有名である。

身寄りのない老人の世話も、無視できない社会問題となっていた。ビーベスは、理想的なのは老人が自宅で介護されることだとしたが、これは多くの老人が自分の家を持っていなかったので実現不可能な理想であった。それゆえ、16 世紀の中頃エルナの参事会の司祭ミゲル・デ・ヒンタは貧しい人と老人が進んで入り、そこでできる範囲で生活費を賄うために各自が仕事をするができるような宿泊施設の創設を提案した。最初に建てられた「慈悲の聖なる家」はキロガ枢機卿のおかげでトレドに創設されたものだが、1584 年には

600人以上の貧しい人を収容していた。二世紀後には、120以上の家が存在していた。ポルトガルにも創設され、その後ブラジルにも移植されて現在も精力的に活動している。

サラゴサの家は、市当局が経営している闘牛場の入場料のおかげで財政がなりたっていた。パンプロナのも同じ経営方式を採っていた。自分なりに貧しい人々との連帯を感じていた当時の社会では、集団の娯楽から得られた資金が最も貧しい人々のために使われることに全く抵抗がなかった。ログローニョでは、劇場が隣接する聖カタリーナ病院の財政を支えていた。

捕虜の解放と囚人や死に行く人の世話

近代のキリスト信者を駆り立てた愛徳のもう一つの面は、イスラム教徒に捕まった捕虜の解放であった。メルセス会や三位一体会の修道士たちは村や町を回って捕虜の買い戻しのための寄付を募った。

キリスト教徒の手になるがゆえに道徳的にずっとひどい行為は、奴隷制度と奴隷売買であった。アメリカ大陸の発見以後、サラマンカ大学の神学部の教えに基づいたスペインの法律は新大陸の住民が自由人で信仰に招かれている人間であると明言したが、征服者たちの中にはこの法律を無視し、インディオたちを奴隷のように扱うことに何の妨げも感じない者もいた。この問題はスペインの植民地ではなんとか解決されたが、他のヨーロッパ諸国の植民地ではそうではなかった。ポルトガルとオランダがそこから不法な奴隷貿易で巨万の富を手にしたアフリカ大陸のケースは、飛び抜けて悪質であった。

同様に非人道的であるが、少しはましな問題が、監獄での囚人の待遇であった。監獄では普通の囚人たちがすし詰めになされていたが、彼らを霊的肉体的に助けようという努力がなされた。イエズス会士ペドロ・デ・レオン（1632年没）はセビーリャの監獄での活動で有名である。

囚人の多くは金銭的理由で投獄されていて、そのほとんどが高利の債務のためであった。まさに高利貸しの悪弊から庶民を守ろうとして、フランシスコ会士ミラノのミゲルによって1462年 Montes de Piedad（頼母子講）が創設された。それは際だって社会的性格のもので、貧しい人たちが金に困ったとき高利貸しに頼らなくてもすむようにというものであった。ローマには1539年ホアン・カルボ修道士によって作られた。スペインではかなり遅く、最初のもはフランシスコ・ピケル神父によって1702年マドリードに創設されたもので、それは18世紀中に70万人以上に融資をし、その利益でもって貧しい死者たちのために50万のミサが捧げられた。

このことはまた別の慈善活動を知らせてくれる。貧者や病人の死は、キリスト教的埋葬をするという、愛徳を実行する最後の機会であった。囚人、旅人、貧者、寄る辺のない人たちを埋葬することを目的とする多くの信心会が存在した。マドリードの「平和と愛の兄弟団」もその一つである。

（略）



18、19世紀における教会の社会活動

José Carlos MARTÍN DE LA HOZ, Academia de Historia Eclesiástica

現代世界の始まりは、フランス革命の前後に置かれるのが普通である。啓蒙思想の熱も冷め、社会と国家を制御しようとする新しい人間観、世界観である自由主義が始まる頃である。この時期、西欧の思想界には合理論が充満し、超自然が排斥される。しかし、多くの家庭とキリスト教徒に深く根を張っていたキリスト教的確信が、社会の幅広い層の人々の信仰を維持していた。教会は自己の使命に忠実を保ち、困窮する人々

を放っておくことなく、新しい個人主義の欠陥を補っていった。



この時代、教会の神学と哲学のレベルは前の時代のように燦然としたものではなかった。おそらく一流の教師の欠如のため、あるいは統一された教育システムの欠如のため惰性に陥ったスコラ哲学が幅を利かせていた。また全欧を支配した合理論哲学とスコラ哲学の間に対話がなかったことも、哲学、法学、自然科学に影響を与えた。啓蒙思想はすべての人に影響を及ぼした。ある者は実験科学の発展に驚嘆しそれがすべての学問の王になると期待した。また他の人々は、自分の確信の殻に閉じこもった。

社会を動かしていた原理はキリスト教であった。たとえ、いくらかの政治家たちは別の像を与えようと躍起になっていたとしても。そればかりか、フランス革命自体が、自由、兄弟愛、平等など多くのキリスト教的概念を利用していた。

名もない人々

フランス革命以降、多くの孤児や貧しい子供たちが市中に投げ出された。世間に広がった個人主義が社会問題を顧みなかったため、革命家たちはこの問題の解決を訴えた。かくて、カトリックの諸団体が再びこの仕事に着手することになった。この時代、政府主導の慈善事業が発展し、キリスト教的な愛徳に代わって「博愛の精神」という耳慣れない言葉が登場してきた。

他方、多くのキリスト信者は福音書の中に状況を改善する手だてを探そうとした。道や小高い丘の頂上のところ狭しと十字架を立てていったのは、名もない庶民であった。ホセ・アンドレス・ガリエゴ教授はこの時代を「あまり重要ではない人々」の時代と総括している。

識字率の高い上流社会では、教理書、信心書、霊的書物などの著作が以前より多く出版されていった。またカトリックの出版社や新聞も増えた。これらは思想的には時代の進歩から遅れていたものであったかも知れないが、教会の教導職に忠実であった。これらの分野では、聖ヨハネ・ボスコ（1815~1888）、1849年にマリアの御心の宣教会を創立した聖アントニオ・マリア・クラレット、そして1894年に「新聞の使徒職」を創設したフランシスコ・デ・パウラ神父の名前が挙げられよう。

新しい観想修道会も生まれた。そしてなによりも、慈善事業に携わる修道会、特に女子修道会が数多く創立された。二三の例を挙げるなら、子供の世話を目的とするものでは、聖ヴィンセンシオ・パウロ姉妹会（1856）やクリュニーの聖ヨゼフ姉妹会（1807）、高齢者の介護では、善き牧者の姉妹会（1835）や身寄りのない貧者の小さき姉妹会（1840）、結核患者の世話に当たる援助マリア姉妹会（1854）、また不治の病人の世話をするカルワリオの婦人会などがある。

教会の様々な組織が促進した病院の広いネットワークはヨーロッパ全土を埋め尽くした。この分野において、神の聖ヨハネの修道士たちの活動を忘れるわけにはいかない。彼らはより専門的な医学を発展させた。

青少年の教育も新しい黄金期を迎えた。イタリアでは福者コットレンゴが創立した神の摂理の小さな家、聖ヨハネ・ボスコによって始められたサレジオ会（1859年）と扶助者聖母会（1864年）、ヴェローナでカノッサの福者マグダレナによる愛徳の娘会がある。

この時代は、教会が多くの場所で政治権力とは無関係に、重要な社会事業を繰り広げたことを他のどの時代よりもよく示してくれる。

新しい問題。社会問題

19世紀は産業革命の世紀であった。大工場、鉄道、製鉄所などがあちこちに建てられ、その結果、農村から大量の人間が都市に押し寄せてきた。かくて、ほとんど権利らしい権利も持たず、低賃金と悪辣な衛生環

境に苦しみ、教育もなく未来に希望の持てない惨めな生活を送る無産者階級が出現した。

ここにおいて教会の社会事業は新しい形を取り始めた。愛徳の事業とともに、社会的カトリックとでも呼べるものが現れ、それは後に教会の社会教説に結晶する。無産者階級の新しい問題と労働者階級の出現に対してキリスト教徒が出した答えがそれであった。

この問題に真摯に立ち向かった無数の一般信徒の中で、リヨンとパリ大学で教鞭を振るったフレデリック・オザナム（1813~1853）がいる。かれは聖ヴィンセンシオ・ア・パウロ会の創立に関わったが、この会の会員たちは定期的に貧しい人々を訪問し手助けをすることを約束した。会員の多くは貴族やブルジョワ階級の間で、貧者の悲惨な状況を目の当たりにして、自分たちの社会的責任の自覚を深めていった。オザナムの死んだ 1853 年にはパリの会員は 2 千人に達していた。

この新しい問題は社会に根本的な変革を要求するものであったが、当時の自由主義国家は教会の権利を踏みにじり教育の分野から教会を閉め出そうとしていた。ベネディクト 16 世はこの点について回勅でこう述べている。「19 世紀以来、教会の行う愛の活動に対して反論が唱えられてきました。この反論はその後、とくにマルクス主義によってますます強く主張されました。この主張がいうところによれば、貧しい人々は愛ではなく正義を必要としています。愛の業 一施し一 は、実際には金持ちが正義のために働く義務を逃れる手段であり、彼らの良心の負い目を取り除きます。こうして金持ちは自分の地位を保ち、貧しい人々から権利を奪います。必要なのは、個々の愛のわざを通じて現状を維持することではなく、公正な社会秩序を建設することだ、と言うのです」（『神は愛』、26）。

自由主義国家によって実行された教会財産の没収は、教会と修道会に大きなダメージを与え、彼らの慈善事業を維持できなくさせた。かくて貧者や弱者は路頭に迷うこととなった。この財産没収は、市町村の共有地にも及び、それから必要物資を得ていた多くの農民の生活も苦しくした。

スペインでのイニシアティブ

こういう状況を前にして、19 世紀のスペインでは社会的性格の事業が次から次へと生まれ出た。例えば、イエズス会士アントニオ・ビセンテ（1837~1912）は 1880 年にトルトサで労働者のサークルを始め、セフェリーノ・ゴンサレス神父（1831~1894）はコルドバで労働者にキリスト教的形成を与え、教養のレベルを上げ、金融機関や学校を促進するために労働者のサークルを立ち上げた。それは、すでに 1862 年に上梓した『政治経済とキリスト教』の中で発表したアイデアの実現であった。そこにはキリスト教と両立する経済が主張され、労働問題解決のための構想が示されていた。この他、同様に融資機関、生活協同組合、生産者の組合、相互扶助の会、カトリック労働者の会、農民組合や職人組合などの創設に功のあったネバレス、コミーリャス、ガフォ、アルボレヤなども挙げられよう。

キリスト教に深く根ざしていたとはいえ、しばしば信仰と遊離していたことを示すその時代の西洋文化は、社会問題に対して神なしの解決を試みるか、あるいは宗教を疎外と考えるマルクス主義や無政府主義のような無数の理想主義的なイデオロギーを生み出した。

自由主義思想も一連の社会問題を前にしては無力であった。不思議なことに、教会は資本家階級と自由主義政府から目の敵にされていたにもかかわらず、多くの人々にとって政府と金持ちの味方と思われるようになった。その原因は、いくらかの消極的な信者が自己の世界に閉じこもる利己主義的な保守的態度を示したことのほか、労働運動の理論的推進者たちが教会はその理想社会の建設を妨害するという、教会憎しの思想を広めたことにある。

ピオ 9 世は、回勅『クアンタ・クラ』を出して、国家が教会に取って代わるとする社会主義の欺瞞だけでなく、経済活動から倫理を切り離そうとする経済的自由主義をも断罪した。真の解決は再び啓示の正しい解

積から、つまり人格の尊厳を守り、愛徳をもって正義を実行すべきである考えから来る、と。

この方向にハイメ・バルメス（1810~1848）やホアン・ドノソ・コルテス（1809~1853）などの一流のキリスト教思想家も貢献した。彼らは人間の超越的な価値を追求すべきこと、富のより正しい分配の必要性、そして欠乏に対するキリスト教的に受け入れることを説いたが、空想主義的社会主義者たちはそれには満足しなかった。パリとリヨンなどのフランスの司教たちが不当な労働時間や少年労働を断罪した事実も忘れられるべきではない。

イギリスではウエストミンスター大司教で、労働者の枢機卿と呼ばれたヘンリー・マニング枢機卿（1818~1892）が特に注目に値する。アングロサクソン世界では、モーラスや『レールム・ノヴァールム』に起源をもつ配分主義の提案が広がっていた。合衆国ではバルチモアの司教、ジェームズ・ギボン枢機卿（1834~1921）が奴隷解放を巡る議論と社会的カトリックの促進で有名である。彼らは愛徳を強調し革命を強調しなかったことで、誤解を受けたが、この努力なしには状況は一層悲惨なものになっていただろう。

いずれにしても、キリスト教徒は批判するだけで何の行動もしなかったわけではない。

19世紀には多くのイニシアティブが生まれた。例えば、マインツの司教エンマヌエル・フォン・ケテラー（男爵。1811~1877）の業績。これと平行してオーストリアでも様々な人物が輩出したが、なかでもカール・フォン・フォーゲルサング（1818~1890）男爵は、法曹家であり新聞記者であったが、経済の基礎を愛徳に据える新しい社会を構想した。労働組合、労働者の尊厳、利益の一部を労働者の社会保障に回すことなどのイニシアティブを実行に移した。他の思想家の助けを借りて、社会改革を唱道する月刊誌を発刊したが、これはカール・ルエーゲル（1844~1910）のキリスト教社会党の誕生に貢献した。

同様にパリでは、ラ・トゥール・デュ・パン（1834~1924）と国会議員ド・マン伯（1841~1914）の周囲に「キリスト教的社会運動」が生まれた。それは「カトリック労働者サークル事業」という会に結晶し、モーリス・メニェンの尽力で全フランスに広がった。

またフランスの議会によって制定されたキリスト教的精神の立法事業も重要であった。この仕事においては、アルマン・ド・ムラン（1807~1877）が注目される。彼は貧者対象の金融機関を提案、国家による孤児院の創設、労働法や公衆衛生などにも気を配った。

産業革命によって、大都市の郊外には、小教区教会もキリスト教的慣習もない異教的世界が出現した。この問題に取り組んだのが、ブラド司祭会の創立者アントワヌ・シェヴリエ（1826~1879）で、この会によってそれらの郊外に司祭が送られることとなった。

19世紀には、前世紀の啓蒙主義の政府によって廃止された伝統的同業組合に代わる組合が生まれたが、これらはカトリック教会の敵となってしまう。ロバート・オーエン（1771~1858）もブルードンも、カトリック教会を王政と資本家と結び資本主義体制を守るものと考えた。しかし、キリスト教精神をもつ組合も生まれた。ベルギーのレオン・アルメル（1829~1915）によって始められた労働組合から、1871年にドイツの中央党が促進した組合主義の発展も、その中に入れられよう。

教会による社会的文化的活動の他の方面では、職業訓練施設がある。聖ヨハネ・ボスコのサレジオ会がまずイタリアに、後に他の国々に創設していった重要な施設。また、レオナルド・ムリアルド、ホセ・カファッツ、ホセ・コットレンゴ、ルドヴィコ・パヴォーニなどの働きも逸することが出来ない。これらのイニシアティブから公衆食堂や衛生施設が生まれた。1874年からは、それらの多くがピサ大学教授ジョゼッペ・トニオーロ（1845~1918）が推進した *Opera dei Congressi* と繋がることになる。トニオーロは未完の『社会経済』の著者で、その中で倫理と経済を結びつけようとした。

* * * * *

近代西欧の海外発展と植民地主義

18世紀は目を見張る宣教活動が展開された世紀である。スペインとポルトガルの王室の後援の下、また教皇庁の宣教省の疲れを知らぬ活動の下で、このころ多くの国が福音を知るに至った。同時に、すでに宣教が始まっていた国々での仕事も続行された。

教会の伝統に違わず、宣教活動とほぼ同時に物心両面に關する慈善活動が始まった。福音の宣教の傍ら、子供や病人や身寄りのない人々の世話、老人の養護施設、ハンセン病患者の施設などが創設されていった。それに続いて、学校の建設、衛生観念の普及、病気の予防、女性の地位向上などの努力が続いた。

この結果、発展途上にあつた多くの民族の文化的社会的レベルが向上した。彼らの伝統に対しより大きな配慮がなされ、信仰の文化内開花／文化内受肉が進んだ。

18、19世紀は移民の大きな波が始まったときでもある。数え切れない人が新大陸に渡つた。カトリック、プロテスタント、ユダヤ教徒たちが新しい大陸に定住し、アメリカ合衆国は新しいヨーロッパとなり、寛容と民主主義の実験に乗り出した。

奴隷制度

この時期の宣教活動において教会が果たした役割は、奴隷制度の廃止への貢献に向けられていた。アルフォンソ・デ・サンドバル、トマス・デ・メルカード、バルトロメ・フリヤス・デ・アルボルノスと言つた著作家たちは、国家は奴隷制度を廃止するべきであるとの主張を展開した。教会とスペイン人の偉大な神学者たちがインディアス法典の編纂に関わつたおかげで、奴隷に対して人間的な扱いを命じる条項が組み入れられたことは疑いない。同法典は、奴隷に多くの権利を認めている。例えば、秘跡を受ける権利を与え、解放の可能性を提供し、主人を訴える権利を認めている。この法律は、奴隷の擁護という点で、フランスやイギリスの法律よりもずっと優れており、後に合衆国やフランスとその植民地において影響を及ぼすようになる。

19世紀になると、植民地に原料の供給地、生産品の市場の役割を求める政策を推し進める植民地主義が勃興する。後に多くの国々が矢継ぎ早に独立を果たすと、宗主国の植民地政策の在り方にかかなりの差異があつたこと、またキリスト教がどれほど影響を残したかの違いも浮き彫りになる。

ひとつ注目に値することは、あらゆる修道会が現地人の聖職者を育成する必要性を感じていたことである。第一バチカン公会議に、いくらかの修道会の総長が最初のアフリカ人司教たちに付き添い一緒に参加したことは、それを表している。

19世紀には古い修道会に加えて、新しい澁刺とした修道会が生まれた。たとえば、ダニエル・コンボーニ（1831～1881）の創立したコンボニーノ宣教会、ラヴィジュリー枢機卿（1825～1892）によるアフリカ宣教会とその女子部。後者は中東や北アフリカでイスラム教徒の間で仕事を始め、のちにサハラ以南のアフリカに活動範囲を広げた。

オーストリア人トラピスト会士のフランツ・ファンエル神父（1825～1909）は1882年に南アフリカのマリアン・ヒルに修道院を建てたが、そこからわずか数年の間に多くの子修道院が生まれ、それらの修道院を中心に福音宣教だけでなく、教育や農業振興の事業などが行われた。この他、ハワイのモロカイ島のハンセン氏病患者の世話に一生を捧げたベルギー人ダミアン神父も忘れることもできない。

アフリカでも教会は奴隷制度の廃止に向けて努力を傾けた。コンボーニ会士たちは、イスラム教商人によって行われていた奴隷貿易の廃止にめざましい成果をあげた。彼らはヨーロッパ諸国の政府が奴隷制反対の態度を取るためのキャンペーンで中心的な活躍をした。

中南米でも社会活動が継続していたが、いくらかの国ではスペインからの独立が原住民の生活条件を悪化させた。多くの国では権力が地主に握られ、そのことで国の真の発展の速度を緩めてしまった。



刷新された伝統：教会の社会教説

Pablo SÁNCHEZ GARRIDO, Universidad de San Pablo-CEU

教会の社会教説の誕生は、レオ 13 世が『レールム・ノヴァールム』を発表した 1891 年とされる。それ以前にもレオ 13 世は、『リベルタス』（1888 年）や『クオッド・アポストリチ・ムネリス』（1878 年）という文書を出している。しかしながら、その起源を探訪するならば、19 世紀ではなく、それよりもずっと以前に遡る。と言うのは、それは社会思想の生まれる以前のキリスト教の伝統から出てきているからである。

ただし、19 世紀に近づくにつれ、レオ 13 世によって始められた教会の社会教説のより近い前例を見出すことができる。回勅『神は愛』の中でベネディクト 16 世もこの先駆者のいくつかを紹介している。具体的には、マインツのケツラー司教（1811~1877）。司教は、社会問題についての説教によって群を抜いているが、そのいくつかは 1848 年、『現代の大きな社会問題』という題で出版された。また、司教には『労働問題とキリスト教』という著作もあり、その中で社会主義と当時の自由主義経済思想に厳しい批判を浴びせ、真正のキリスト教的社会を建設することがいかに必要かを説いている。この他に、『レールム・ノヴァールム』の先駆者として、フライブルグ社会研究のカトリック連盟の長を務めたメルミヨ（1824~1892）、H.E. マニング枢機卿（1808~1892）、イタリアのイエズス会士の神学者ルイジ・タパレリ・ダツェリオが挙げられよう。

しかし、『レールム・ノヴァールム』に戻ろう。この回勅は多くの点で遠い過去に遡りまた遙かな未来にもつながれている（ピオ 11 世、『クアドラジェッシモ・アンノ』、23~40）。実際、その問題のとらえ方は大部分、伝統的キリスト教倫理、特にスコラ神学の倫理学から出発している。しかしながら、この生きた伝統からレオ 13 世は、近代的で複雑な社会問題を突きつける「新しいこと」のために刷新された思想を引き出すことに成功した。家族賃金や「ほとんど奴隷のような」労働条件の改善という、レオ 13 世がこの文書に綴った提案の多くは、ある信者たちからは「疑わしい」思想、はては「危険な」思想と警戒されたほど前代未聞の新奇さだったのである（参照、『クアドラジェッシモ・アンノ』、14）。

『レールム・ノヴァールム』が教会の内外に与えたインパクトの大きさは、後の諸教皇がこの回勅発表後の何十年かの区切りの年に社会問題に関する回勅を發布し続けたことでもわかる。それらの後の文書の多くが、それを記念し継続する内容であることを名前で示してさえいる。

さて、教会の社会教説には、注意を喚起すべき一つの特徴がある。それは『レールム・ノヴァールム』において特別に現れているものだが、キリスト信者、なかでも一般信徒に教導職が社会的教えを示さねばならなかったという現実である。それはまた現在もそう大きく変わっていない。言葉を換えて言えば、真実のキリスト教の本質と存在を脅かす二つの障害があったという現実である。つまり、一方で物質的側面をまったく無視した精神主義、他方で精神的側面を隅に迫りやった物質主義である。精神主義は信仰の世俗的次元を否定したり軽視したりするもので、それは歪められたキリスト教と言える。なるほど、霊的なもの（秘跡的交わりや信心生活など）はキリスト教徒にとって本質的なもので、キリストにおける神との交わりがなければ信者の活動は存在理由を失い、そのエネルギーは自己の源泉を枯らしてしまう。キリストなしのキリスト教はあり得ないからである。しかしながら、隣人への愛という世俗的側面と、肉体も含めたところの全人格への配慮という面を軽視するならば、それはキリスト教を墮落させ、教会と一般信徒の役割を否定することになる。この意味でベネディクト 16 世は、聖ヨハネの手紙（第一、4 章、20）を引用して、「人が隣人に心を閉ざしながら、神を愛していると言えば、それは偽りです。・・隣人から目を背けるなら、神を見ることもできなくなるのです」（『神は愛』、16）と注意している。

隣人との水平の関係を忘れて神との垂直の関係だけを打ち立てようとするならば、それはキリストがあれ

ほど厳しく批判したファリサイ主義に陥る。その根底にはキリスト論と教会論の誤りが潜んでおり、そこからただあの世ことだけに目を向けさせるキリスト教が生まれる。また自然の次元では、人が肉体と霊魂からなっていることを忘れるという人間論での誤りと、カトリックの自然神学が指摘する神の超越性と内在性の関係を誤解するという形而上学的な誤りも無視できない。

ひるがえって、物質主義はそれとは正反対の誤りで、キリスト教をただ世俗的この世的な思想にしてしまい、教会の活動を慈善事業に限ってしまう。霊的な面を犠牲にしてまで世俗的なものに集中させる。この考えでは、キリスト信者は自己の活動を一種の介護関係のそれか、NGOのメンバーのそれと見なすようになり、イエスキリストは何か尊敬に値する理想主義的な人物に成り下がる。また、隣人との単なる水平的関係のみが求められ、教会の仲介によって神に目を上げることは弱められるか、せいぜい何かの疑似宗教が提案されるくらいである。このケースの極端な例が解放の神学である。それは当時のラッチンガー枢機卿によって二つの指針の中で分析されている。(特に二つめの「キリスト教的自由と解放」) 今日では、解放の神学は一時的な再興が見られるとはいえ衰えを隠せず、代わりに土着の神学というものが台頭しつつある。ともかく、物質主義の誤りに対して、ベネディクト 16 世はキリスト教的愛徳の業は、博愛主義的な説明や思想によってこの世界を改革しようとするものではなく、個々の人間が必要とする愛を実現しようとするものであると教える。精神主義と物質主義の誤りは、この二つを足して二で割るような仕方、あるいは弁証法的に解決されるのではなく、「信仰と礼拝と生き方(エートス)は、深く結び合わされた一つの現実です。この現実は、神のアガペーとの出会いによって形成されます。こうして、礼拝と生き方の間に置かれる対立は即座に消えてしまいます」(『神は愛』、14)。解決は、縦柱と横柱が組み合わさってできる十字架という象徴的なしるしにある。ヨハネ・パウロ 2 世は枢機卿時代に、教皇パウロ 6 世に行った霊操の中(その説教は後に『反対のしるし』という題で出版された)で、十字架が「選ばれたしるし」となった摂理的な意味に触れている。

以上のすべての考察に加えて、二つの特長を説明したい。それらは互いに関係あるもので、教会の社会教説がいかなるものか、またいかなる歴史的発展を経たのかを理解するために一助となる。一つは、社会教説は継続的に深化している点。もう一つは発展の中に同一性を保っている点である。教会の社会教説は、レオ 13 世の『レールム・ノヴァールム』(1891 年)に始まりベネディクト 16 世の『神は愛』(2005 年)にいたるまで連綿として増え続け、いまでは膨大な量になった社会教説全集ともいべきものがある。二つめの特長は、教会の社会教説にはその基本的な部分において首尾一貫しているものがあり、その中でも時間を超えた普遍的な意味をもつ一連の教義上の原則が目立っている。これらの原則はキリスト教の伝統に根ざし、その多くは、たとえば共通善や政治共同体への参加の重要性、あるいは「社会的愛徳」(ヨハネ・パウロ 2 世はこの概念はアリストテレスの《政治的友情》の概念に一定の影響を受けていると指摘する)などの概念のように、古典的自然法学の伝統自体から生まれている。

しかし、キリスト教の古典的な伝統との結びつきとともに、教会の社会教説には発展の二つの要因がある。一つは、教会の社会教説のそれぞれの文書は、それが書かれた時代の社会についての倫理的判断と評価が含まれ、そのことがその文書をこの上なく実践的で帰納的なものになっている。この意味で『レールム・ノヴァールム』が 19 世紀の社会主義(階級闘争、無神論的唯物主義、私有財産権の完全な廃止、無産階級による独裁などの思想によって特長づけられる)に対して下す評価は、ピオ 11 世、ヨハネ 23 世、パウロ 6 世がそれぞれ 20 世紀の 30 年代、50 年代、60 年代の社会主義に対してした評価と当然異なるのである。もちろん、教会の社会教説が社会主義の欠点に対して極めて批判的であることには変わらない。同様なことが、自由主義経済思想、あるいは自由主義資本主義に関しても言える。しかしながら、それらの評価に関して教会の社会教説の文書による違いがあることは、教導職が自己の考えを「発展的に」修正していったということの意味するのではない。先行の文書が下した評価は、それを生じさせた状況においては相変わらず有効であり続

ける。このことは、教会の社会教説が進化した挙げ句、パウロ 6 世が社会主義の容認するに至ったという解釈は受け入れられないことを意味する。その解釈は、パウロ 6 世の言葉（『オクトジェッシマ・アドヴェニエンス』、50）の曲解といえる。その反対に、教会の社会教説は初期のレオ 13 世やピオ 11 世による資本主義や自由主義経済への厳しい断罪に始まったが、徐々に発展した結果、ヨハネ・パウロ 2 世によって事実上容認されるに至ったという解釈も認められない。それは教会の社会教説と『チェンテッシマス・M.Novak』を誤解したヘルガ・マリア・ノヴァクの解釈である。いくらかの教会の社会教説の研究者に常に見られる深刻な誤りの一つが、それをイデオロギーにしようとすることである（いわゆる我田引水の解釈である）。もしヨハネ・パウロ 2 世が教会の社会教説を倫理神学でありながら、「自由資本主義とマルキスト集団主義との中間に位置する《第三の道》」として解釈すべきではないと明言された（『真の開発とは』、41）のなら、教会の社会教説を二つの道のどちらかからそれを解釈しようとするのは、もっと理屈に合わないことであろう。

継続性と発展の両面をもつという性格は第二バチカン公会議の教会の社会教説にも当てはめることができよう。公会議は、典礼や教会の中での一般信徒の役割などの点で多くの分野で実りをもたらしたが、社会教説に関してはそれ以前のものに比べて新奇なものはそれほど見つからない。この面における変化は、むしろ方法論において見られる。事実、『現代世界憲章』は、それ以前の教会の社会教説を体系的にまとめたものと言える。その一方で、宗教の自由を認めることが、政治倫理の重要な側面であり、「近代国家」の基本的原則の受容を構成することであることを認める必要がある。しかし、ベネディクト 16 世が言うように、それによって公会議はイエスと初代教会の殉教者たちの教えと完全に一致して、「教会の最も貴重な遺産を受け取った」のである（2005 年 12 月 22 日、ローマ教皇庁の高位聖職者たちへの演説）。ベネディクト 16 世は同じ教会に、「公会議以前の教会と以後の教会で断絶があったかのような誤解に導く、・・・不連続と断絶に向けられた考察」に対して、時間の中で成長し発展するが、つねに変わらぬ同一性を保つ主体である教会の連続性の中の刷新という意味での「改革に向けられた考察」をするべきと話す。公会議を前にしてヨハネ 23 世が言われたように、「我らの尊敬すべき教えがもつ諸真理は不変であっても、その諸真理の同じ意味内容を維持しながらも、それを伝える仕方は異なる」のである。

パウロ 6 世の重要な社会教説の文書、なかでも国の発展に関する『ポプロールム・プログレッシオ』（1967 年）と『オクトジェッシマ・アドヴェニエンス』（1971 年）を受けて出されたヨハネ・パウロ 2 世の文書は、前者を継続するという強い意志が見られる。実際、発展途上国の問題に触れた『ソリチトゥード・レイ・ソチアーリス』（1987 年）は『ポプロールム・プログレッシオ』を記念して出されている。しかしながら、ヨハネ・パウロ 2 世とベネディクト 16 世の教えは、前者が「新たな福音宣教」と呼んだものの必要性が強く意識されている。ヨハネ・パウロ 2 世以後の社会教説関係の文書はこの「新たな福音宣教」という挑戦の精神を色濃く示すことになろう。それは、色あせた現代社会がかつて持っていたキリスト教の若々しさを取り戻し、単に物質的面だけではなく、文化的、社会的、精神的面においても開花することができるためである。21 世紀の指南書としての『神は愛』は、そのことの明白な証拠を構成する。

ヨハネ・パウロ 2 世が『チェンテッシマス・アンヌス』の冒頭でした勧めをもって、この考察を締めくくりたい。それは「未知のことと希望で一杯の」第三千年紀において「未来に目を向ける」ためにレオ 13 世の回勅を読み返すことである。

* * * * *

教会の社会教説の前史

広義の意味では、教会の社会教説は教会とともに誕生したと言える。初代教会の時代から、福音の光を受け古典哲学の思想に基づき、教会の教父たちはキリスト教的社会思想の原則を考案していった。この聖なる

学者たちが肝胆を砕いて考察した原則には、「財の分かち合い」の原則 —社会教説に見られる資源は全人類のためにあるという原則の先行思想— の下に貧者への施しを勧めたり、飢餓に苦しむ人を忘れて財を貪る者 —聖バシリウスは飢えて死に行く者を見捨てる者を「冒涇者」、「殺人者」と呼んでいる— への辛辣な批判、病人を初め孤児や寡婦を助ける重大な義務、労働者への正当な報酬などがある。

この他に、社会教説の先例として、古代社会で福音の御言葉を伝えるとともに文化と道徳のレベルを向上させることに貢献して、野蛮な社会に潤いを与えた偉大な宣教師たちがいる。二三の例を挙げるなら、西欧世界では聖ベネディクト、東方世界では聖キリルスと聖メトディウス。これらのヨーロッパの真の父たちの仕事は、古典文化の保持と刷新において決定的な役割を担った。

このように、キリスト教の伝統はすでに古代から古典文化の遺産を受け継ぎ、信仰と理性の実りある同盟によって文化の革新にたえず貢献していった。この同盟は聖アルベルトゥス・マグヌスや聖トマス・アクィナスを始めとする偉大な中世の神学者たちによって、卓越した仕方で完成された。まさに、これらの知恵のゆりかごである初期の大学は、中世のキリスト教世界から生まれた。この傑出した神学者たち、なかでも人類の博士、聖トマス・アクィナスらの影響下に、スコラ神学者と呼ばれる綺羅星の如く輝く神学者の群れが出て、神学だけでなく、人文的学問や社会的学問の領域を拓いていった。代表的例として、有名なサラマンカ学派の教師フランシスコ・デ・ビトリアが挙げられよう。彼は自然権という考えを土台にして、異邦人の法 —今日で言う国際法— の理論を構築し、人権を世界的規模で擁護するパイオニアとなった。この他に、サラマンカ学派には、ドミンゴ・デ・ソトやマルティン・デ・アスプリクエタなどのように、経済学の父と呼ばれるアダム・スミスに何世紀も先だって体系的な経済理論を構築した。シュンペーターの影響を受けて、彼らを資本主義の先達と考えようとする人たちがいるが、彼らの経済理論はスコットランドの啓蒙主義的自由主義者たちの理論よりも、はるかに強い倫理的で規範的な性格を持っていることは否めない。『諸国民の富』のアダム・スミスよりも、『倫理学』のアリストテレスにずっと近いと言える。



冷たい 20 世紀における愛徳の行動

Javier Láinez

ベネディクト 16 世の回勅『神は愛』の第二部は、第二次世界大戦後世界に広がった悲観論「愛は不可能」という主張に対する反駁である。悲惨極まりない歴史を残した 20 世紀には、苦しむ人々の側に止まりその傷を癒そうとするよきサマリア人の役割を果たした多くのカトリック信者もいた。「私たちは愛を実践することができます。わたしたちは神の像として造られているからです」（『神は愛』、39）。

フランス革命以降、国家は慈善事業を独占しようとした。フランスでは激しい革命の波が、病院や学校、孤児院や保護施設から修道会を追い出したが、それによってできた大きな空白を埋めるには数十年かかった。公衆衛生担当の委員会は、仕事を増やさないために、パトロールに励み、計画を練って、ギロチンで市民を粛正するという手っ取り早い手段を講じた。その間、人々は飢えに苦しみ、教育を受けられず、汚いあばらやで死んでいった。

現代社会の悲惨

18, 19 世紀に起こったフランス革命とそれに続くアメリカ諸国の独立は、住民をほったらかしにしてしま

ったが、それに加えて貧富の差の拡大、飢え、移住という産業革命の諸結果の波が押し寄せてきた。

しかし、この社会問題は政府をして、一特にヨーロッパでは— 衛生管理から生活扶助に至までのサービス網を張り巡らせることになった。これらすべてがいわゆる「福祉国家」を生み出す。しかし、この西欧民主主義国家の最良の成果だと考えられているものは、数十年前からそのほころびを示しつつある。そのわけは教皇が細やかにこう指摘している。「あらゆるものを提供しようと望む国家は、最終的に単なる官僚国家となります。この国家は、苦しんでいる人 — 一人ひとりの人 — が必要とするものそのもの、すなわち人からの親切な思いやりを与えることができません」(『前掲書』、28b)。

時に迫害を受けて、そしてほとんどいつも無視されながらも、何があろうと教会は苦しむ人々を助け続けた。福祉国家の福祉制度は、いかによくプログラムされていても、行き届かない多くの分野を残す。実際に人々を救ったのは、何百枚にも及ぶ大部の計画書よりも、小教区の教会や修道院から毛細血管のように張り巡らされた慈善組織の目立たない活動であった。この 20 世紀には、キリスト信者も他の人々と同じように、人種や無産者階級や資本を神として崇める祭壇で人間が生贄に捧げられるという身の毛もよだつような光景を目の当たりにした。ナチや共産主義国家、社会的実験というのろわれるべき行動によって広められた人権侵害や強制収容所で、歴史上のあらゆる人間の苦しみが頂点に達したようだ。

それでも二つの世界大戦は、19 世紀に生まれた博愛を目指す組織の有効な助けを借りることができた。その一つが、1859 年のソルフェリーノの戦場に横たわった 4 千人の死傷者を目撃したアンリ・デュナンが創設した赤十字である。1863 年に創設されて以来、この誉むべき組織は世界中の賞賛を浴び、人類愛の象徴のように考えられている。嫌らしい比較をする気はまったくないが、以下のことを示すことは価値あることだと思う。つまり、それほど人目を引くことなく、普通はより貧弱な手段しか持たずに、教会も苦しむ人々の側にいたことを。赤十字と類似の目的をもった団体を挙げるなら、マルタ騎士団(その起源は 11 世紀に遡る)は、1 万 2 千人の団員と 8 万人のボランティアと 1 万 1 千人の職員とともに、120 以上の国で「貧しい人々の援助」に肝胆を砕いている。戦闘や自然災害の被害者を助け、救急隊、病院、診療所、公衆衛生の施設、障害者や高齢者や青少年やホームレスや中毒患者のための訓練施設、緊急事態のための救援のプログラム、避難民や亡命者の世話などに当たっている。元々の軍事的な性格を失って以来、マルタ騎士団は赤十字の設立とほとんど同じ時期から福祉活動を繰り広げている。

これらに加えて、小教区、教区、国家、国際的な規模で行われている「カリタス」の地道でコンスタントな活動を忘れてはならない。それらは膨大な額の資金を、弱者のために誠実に管理し効果的に使用している。(スペインの「カリタス」は 2004 年に使用した 1 億 6 千 4 百万ユーロ(約 2 億 5 千万円)のうち 60%が個人的な寄付による)。「カリタス・インテルナシオナリス」は世界中に散らばる 126 の国の「カリタス」を含んでいる。その影響下に生まれた「ミゼレオル」や「アドヴェニアット」などの組織の評判は言うまでもない。1942 年にラウル・フォロローによって創立された「貧者のとき」はハンセン氏病患者の人生を変えることに成功しただけでなく、彼らを隔離し忘れ去られた存在にしていた多くの国の法制を改正することにも成功した。

社会的カトリック

1891 年の『レーラム・ノヴァールム』の公刊をきっかけとして、単なる社会問題の解決だけでなく、キリスト教的愛徳の実行を目指した組織や運動が雨後の筍のように出現した。20 世紀に多くの知性を虜にしたマルクス主義は、キリスト教が彼らによれば「革命的活力を弱める」諦念を説くことによって抑圧者の側に立ったと非難するに至った(『神は愛』、31b)。しかし、教皇が指摘するように、この非人間的な哲学は決して達成できない未来の理想郷であるモロクに犠牲を捧げ、人間が人間に対してする個別的で効果的な行動を疑

問視し迫害する。

教会は、特にレオ 13 世の呼びかけとともに、社会的活動に信者たちを駆り立てた。純粋に政治的な活動だけに止まるのではなく、資本家や国家の搾取を前に見捨てられた弱者の絶望的状态を見て、貯蓄銀行 (Caja de Ahorros)、相互基金 (Montes de Piedad)、労働者サークル (Circulos de Obreros)、多くの共同組織の構想、農民や職人や労働者の組合などが生まれた。

20 世紀の末に出た、ワレサが率いる「連帯」という運動は、カトリック労働組合の素晴らしい代表である。品位を踏みにじられたポーランドの労働者たちのための戦いは、彼をしてダンチヒの造船工場から立ちあがらせ、1983 年のノーベル平和賞を受賞させ、1990 年のポーランド共和国の大統領の地位にまで上げた。

スペインではこの種の弱者の地位の向上を目ざす運動は、モンダラゴンの協同組合のような工業部門での進歩もあるが、とりわけ農村で日の目を見た。すなわち、農業に従事する人々を農業組合や流通の過程に組み込むことを目指す、「下からの」と呼べるような構想が出現した。経営者の側からなされた創意としては、スペインではコミーリャス侯爵クラウディオ・ロペス・ブルやビセンテ神父が促進した組合運動が有名である。例を挙げれば、労働者サークル、レオ 13 世銀行、社会弱者の擁護センターなど。自身経営者で (スペイン内戦の宗教迫害の犠牲になった殉教者でもある) ビセンテ・ビラールは、マニセスの陶工学校を創設した。内戦後には、モラレス神父の雇用者の家庭を初めとする一連の施設があるが、それらはほんの一部に過ぎない。

アメリカ合衆国ではワグナー法が有名である。その法律を発案したワグナー氏は、レオ 13 世とピオ 11 世の社会教説の影響を受けてカトリックに改宗した議員である。その法は、会社から独立した組合を結成する自由を労働者に与えている。

世界の中での目に見えるキリストへの愛

第二次世界大戦が終わると、一人の愛徳の巨人が現れた。それはオランダ人のプレモンストラテン会士、ベーコン神父と呼ばれたウエレンフリード・ヴァン・ストラテン神父 (2003 年没) である。師は、戦争による悲劇は物質的な被害だけにとどまらず、ドイツに占領された国々 (オランダとベルギー) の人々が侵入者に対して抱いた怨恨がぬぐいきれないことも含む、憎しみによる心の傷を癒さねばならない、と悟った。そうして、まず 3 千人の司祭と東ドイツを含む共産主義諸国から逃げてきた 6 百万人の亡命者を助けようと呼びかけた。

ストラテン神父、一悲惨な状態にあるドイツにベーコンを送ろうと呼びかけたため、ベーコン神父のあだ名がついたのだが一の仕事は広く人々の心を捉え、初期のトラックでの移動聖堂や聖書のポケット版の配布などの作業から、現在では聖座とも結びついた規模の大きな事業となり、「貧窮の中の教会への援助」として世界中に知られるようになった。

飢餓という恐ろしい疫病 一富める国々によっても国際機関によってもまだ十分な解決策が施されていない大問題一 と戦うために、1960 年にカトリックの発意によって「一つの手」という組織が生まれた。毎年 4 千万ユーロを超える資金を集めて、いかなる差別もすることなしに発展途上の国々の何百万という人々への援助を行っている (2004 年には 64 の国で 887 のプロジェクト)。その資金の 80% が個人的寄付からなり、年々、千以上の大小のプロジェクトの実行に当てられている。井戸の掘削、学校や農場、住居、仕事場、図書館、食堂などの建設、電気設備、飲料水の補給体制の整備、見捨てられた人々の教育 (インドでは最下層の人々の世話に当たっている) などなど枚挙にいとまのない活動が繰り広げられている。

20 世紀の末には、「貧者の中の最も貧しい人々」に奉仕するカルカッタのマザー・テレサという奇跡が起った。その志は、単に何かを与えるだけでなく、苦しむ人々の中にキリストの顔を見つけることができる

ような観想生活を求めて自己を与えることにある。その模範は第三世界だけでなく、先進諸国から見捨てられたような、ヨハネ・パウロ 2 世がいみじくも「第四世界」と名付けた世界にも及んだ。2003 年に福者に上げられたマザー・テレサは、愛の宣教者会の 3 千人のシスターたちという後継者を残し、彼女たちは現在 30 の国で 300 に近い家で奉仕の仕事をしている。

教育の世界

スペイン内戦の戦火が止んだとき、同国の国民のほぼ四分の一が文盲であった（1940 年、23. 2%）が、1975 年には識字率はほぼ 100%に達していた。政府による努力もさることながら、これには個人や修道会の学校経営の努力が寄与した。また高等教育を受ける女性の割合も今までなかったほど高くなった。

フランスの農村地帯では「農村家族学校（EFAs）」が隆盛を見せた。これは学校教育と農家の仕事を交替ですというオリジナルで融通の利いた教育法を用いて、農民の教育レベルを向上させ、彼らが大都市への移住をしなくてもすむようにした。

スペインでも、聖ホセマリア・エスクリバーのおかげで EFAs が生まれた。しかし、この聖人の天才的な直感により広いものであったことを付け加える必要がある。つまり、人はパンだけで生きるものではないことを意識し、教育の主役（子供の親）に誰かが学校を作るのを待つのではなく、自分たちで学校を作るように励ましたことである。

1967 年 10 月 1 日、マドリードのタハマル高等学校で催された教師と生徒とその保護者との集まりでこのように言っていた。「人々を動かし、誰もが品格ある仕事を持つようにしなくてはならない。[・・]。大金をばらまく時代はもう終わった」と。この構想の実現のために、「貧困のあるところ、仕事のないところ、悲惨と苦悩のあるところ」に積極的に出て行き、「苦しみを喜んで堪えることが出来るように、貧困が消滅するように、仕事が欠けることがないように ー私たちは仕事ができるような人々を養成するのだからー、また各自の自由を尊重しながら、当人が望むならば、彼らの人生にキリストを入れるために」働くように励ました。

一見単純だが無視できない構想は、南北アメリカ大陸でも実を結んでいる。啓蒙的自由主義の悲劇的な矛盾に飽き飽きした新大陸の若い国々は、この地上の富を獲得するためにはよい教育による社会的また文化的レベルの向上が必要であることを、よりはっきりと意識してきたようだ。

* * * * *

事実によって中傷に反駁する。教会はエイズに対する戦いを主導している

先進諸国で繰り返されている反カトリックのキャンペーンの一つが、第三世界でのエイズの蔓延を教会と教皇のせいにするものである。彼らによれば、聖座がコンドームの配布に頑固に反対していることが、エイズが最も蔓延しているアフリカ諸民族を窮地に追いやっているというのである。

他方、彼らは、国連や各国政府やNGOなどが繰り返している対策も結果を上げていないということについては普通言及しない。彼らの戦略には何百万ユーロが費やされているが、エイズは一向に衰えていない。『ニューヨーク・タイムズ』に載った記事で、デヴィッド・ブルックスはオーストラリア人のマイケル・クックの印象を紹介している。クックによれば、「カトリックがエイズの伝播を助長しているという議論を論駁するには、エイズ患者の分布を示す地図とカトリック信者の分布地図を見比べるだけで足りる。エイズ患者が人口の 42.6%を占めるスワジランドでは、カトリック信者は 5%。患者が 37%のボツワナでは信者は 4%。患者の割合が 22%の南アフリカでは信者は 6%。それに反して、カトリック信者が人口の 43%を占めるウガンダでは、エイズ患者は成人人口の 4%である。

つまり、教会は、不正な攻撃に苦しみながらも、口だけでなく、病気の予防だけに止まらず患者の世話においても過酷な仕事を推進しているのである。サンパウロの大司教で国連への聖座の代表であるフンメス大司教は、「エイズ患者の世話に当たる団体の 12%がカトリックで、その援助の 13%がカトリック関係の N G O から来ている」と言う。

(中略)。

家族のための聖座の委員会に勤めるフランス人の司祭であり医者であるジャック・ソドー師は、6年前に『オッセルバトーレ・ロマーノ』紙上でこう言っている。「サハラ以南のアフリカでのエイズ予防運動においてカトリック教会が果たしている役割は無視できないものである。ウガンダ、タンザニア、ナイジェリアでは、修道者や司祭や一般信徒によってエイズ撲滅のため働く若者のグループが作られている。これらのグループの中には“*Youth Alive*”とか“*Youth for Life*”といった意味深長な名前を冠しているものがあり、それらにおいて若者たちがまず自らが結婚までの性交渉をしないという節制を実行する約束をし、それを学校の同級生に広めるというやり方でエイズへの戦いを推進している。(・・)。ウガンダの場合は模範的である。反エイズ運動に従事している国連の支局によって提出された調査では、1989年から1995年の間にエイズは10%の減少を見た。その原因として、その機関はコンドームの普及を挙げているが、同時に次の現象を指摘している。それは我々にはより重要と思えるものである。つまり、「若者の態度の変化。性交渉を結婚まで延期するということが見られ始めた。(・・)。これは教会の教えである。(・・)。確かに容易なモデルではないが、信仰と希望に根ざした十分に人間的な何かである。」

(略)。